

校歌 永遠の幸

(札幌農学校校歌)

大和田建樹氏 校閲

有島武朗君 作歌

納所弁次郎氏 選曲

一

永遠とこしへの幸さいわく朽くちぎるほまれ誉ほまれ

つねに我等われらがうへにあれ

よるひる育そだてあけくれ教おしへ

人ひととなしし我庭わがにわに

二

北斗ほくとをつかんだかき希望のぞみは

時代ときを照てらす光ひかりなり

深雪みゆきを凌しのぐ潔きよき節操みさおは

国くにを守る力ちからなり

三

山やまは裂さくとも海うみはあすとも

真理しんり正義せいぎおつべしや

不朽ふきゅうを求め意気いき相あゆるす

我等われら丈夫ますら此こゝにあり

(※)

イザイザイザ

うちつれて進むすすは今いまぞ

豊平とよひらの川かわ尽つきせぬながれ

友ともたれ永ながく友ともたれ

(※繰り返し)

(※繰り返し)

(注 有島武郎在学中の明治三十三年の作。)

大和田建樹(二八五六 - 一九一〇)は作詞の面で、

納所弁次郎(一八六五 - 一九三六)は作曲の面で、

共に近代日本唱歌史に大きな足跡を残した。)

一 帶ゆるぎ

(明治四十年寮歌)

田中義麿君 作歌
高松正信君 作曲

一

一帯ゆるぎ石狩の
源遠く霞罩め
五彩を染むる夕照は
手稻の夏の栄にして
そこに無限の恩寵あり
是吾校の在る処

二

胡沙吹く風に秋闌けて
黄葉散りしく牧場千里
満野の吹雪叱咤する
エルムの姿壮なれや
そこに無限の偉力あり
是吾寮の在る処

三

恩へば遠き三十年の
榛莽あしたの日を蔽ひ
ゆふべの月に罨熊吼ゆる
北海の野に鋤入れて
偉人が植ゑし桜花
薫は高し千万古

四

海を距てて南の
空の彼方を眺むれば
古人の道は跡もなく
文明の徳は尚成らず
溟濛天に漲りて
帰鳥夕に彷徨ひぬ

五

颯々として風狂ひ
北海の潮黒むとき
電光淒く駛りては
鬼啾々の声すなり
破邪の剣を右手にして
起てるは誰ぞや吾健児

六

岩間に咽ぶ溪流も
明日は黄河に波うたむ
蟄竜遂に雲を呼び
鳳雛やがて時を得て
扶揺に搏つて騰りなば
颯々遂に影もなし

太虚の齡

(明治四十一年寮歌)

田中義麿君 作歌

早川直瀬君・前川徳次郎君 作曲

一

太虚の齡は知らねども
興廢うつる人の世の
文化の跡は四千年
ありし往昔を温ね来て
吾が世の状態を眺むれば
希望ある前途かな

二

嘗てナイルの河水に
偉影涵せし金字塔
アテネの春も夢なれや
ローマの紅紫また散りて
欧米の空今正に
文化の花ぞ盛なる

三

偉大ならずや雪潔き
ヒマラヤ山下風薫り
四百余州に吹き入れば
聖賢雲と叢起して
深き思想は東洋の
青史不朽の誇あり

四

今東海の一孤島
文化の潮寄せ来り
東西の岸を洗ひつつ
高き響を伝ふなり
孤島にこもる国民の
使命などは軽からん

五

既に天地の利は獲たり
人ら豈それなからんや
滿韓の原遺利多く
アルゼンタイン野は広し
故人の教訓聴かざるや
「ピーアンピシアスボーイズ」と

六

猛き心の往くところ
虎狼鯁鱔ものならず
テキサス鍬を入るる可く
シペリヤ斧を振ふ可し
故人の教訓膺にせよ
「ピーアンピシアスボーイズ」と

希望の光

(明治四十二年寮歌)

加藤茂雄君 作歌
金原善知君 作曲

一

希望の光仰ぎつつ
おもはば友と尋ね来し
山は紅朝日子の
燃ゆる姿に似たる哉
嘶く駒は秋に肥え
我等が門出栄ありき

二

ああ冬寒し北国の
大野の果を眺むれば
雪かあられか空たえて
限りは知らず暮るとも
我等が胸に黙想あり
星の光に啓示あり

三

黙想を胸に結ぶ時
啓示を空に望む時
見よ下萌ゆる若草の
息吹さやかに風薫る
春は来れり春は来ぬ
物皆此処に力あり

四

春の光の照る所
色を交へて咲く花に
蝶舞ひ鳥は囀りて
我等が血潮躍るなり
斯くて見渡す行手には
光蔽はん影もなし

五

深く霞に鎖されて
都の様は知らねども
夕孤雁の声聞けば
人太平に眠るとや
吹雪に練りし双の腕
鳴るよ常盤の夢醒ませ

六

四年の昔人々の
耘り建てし我が寮に
春立ち還る時よ今
希望の光新なり
さらば起て友諸共に
我等起つべき時なれば

帝都を北に

(明治四十三年寮歌)

谷村愛之助君 作歌

柳沢秀雄君 作曲

一

帝都を北に三百里
津軽の海を越え来れば
紅塵絶えて空潔く
蕭々として水寒し
大陸の精鍾まりて
我北州の島と凝る

二

鯨群吼ゆる荒潮に
落つる北斗の影冴えて
斧鉞入らざるや森林や
人跡絶えし大野原
原始の儘の俤を
我北州の島に見る

三

鈴蘭薫る春の野辺
楡の下蔭草繁る
霜葉燃ゆる鳶葛
吹雪は叫ぶ冬の夜半
四季の変遷興添えて
眺めは飽かぬ姿かな

四

朝霧深き野の面に
嘶く駒の跡追へば
露の白玉散り乱る
甘藍の畑たそがれて
プラウの土を払ふ時
農牧の幸謳ふかな

五

見よ文明は北進す
古霧は盛らず新酒を
新文明の建設は
濁れる都にあらざして
渺たる大河の片辺
地は広漠の沖積層

六

此聖都を永久に
浮華輕佻の国とせず
真摯素樸の郷となし
我等が使命成し遂げん
真理の秘奥探る可く
道義の光照す可く

藻岩の緑

(明治四十四年寮歌)

松山茂助君 作歌
柳沢秀雄君 作曲

一

藻岩の緑春蘭けて
万朶一朶の朝霞
憧憬彩と流れては
花皆奇しき香ならずや
若き血潮の踊る時
希望の前途光あり

二

青葉波よるアカシヤの
薫る木影に立ちよれば
長風夏の雲ゆらぎ
秋は牧場の夕まぐれ
鐘声止みて今暫し
牛の背に散る鳶紅葉

三

あはれ「美の国」石狩の
自然を己が揺籃に
おほし立つ可き人皆の
意気紅霞に似たるかな
一撃万里す大鵬の
翼整装ふ思あり

四

斗南の翼拡げては
天地広しと誰か云ふ
雲より高きアンデスの
裾野に友よ羊逐へ
天に漲るアマゾンの
岸辺の森に斧を振れ

五

弦月落ちて白楊の
樹林の暗の深き時
八荒裂けて万籟の
声すさまじく吹雪く時
世の濁流を叱咤して
巨人の叫び茲にあり

六

浮華輕佻の風あれて
驕奢の波は狂ふとも
北斗の光清ければ
世は永久に我世なり
聞けや人々北州に
正気溢るる意気之歌

都ぞ弥生

(明治四十五年寮歌)

横山芳介君 作歌
赤木顕次君 作曲

一 都ぞ弥生の雲紫に
花の香漂ふ宴遊の筵

つきせぬ奢に濃き紅や
その春暮れては移らふ色の

夢こそ一時青き繁みに
燃えなん我胸想ひを載せて

星影冴かに光れる北を
人の世の清き国ぞとあこがれぬ

二

豊かに稔れる石狩の野に
雁遙々沈みてゆけば

羊群声なく牧舎に帰り
手稲の嶺 黄昏こめぬ

雄々しく聳ゆる楡の梢
打振る野分に破壊の葉音の

さやめく鶯に久遠の光り
おごそかに北極星を仰ぐ哉

三 寒月懸れる針葉樹林
櫛の音凍りて物皆寒く

野もせに乱る清白の雪
沈黙の暁霏々として舞ふ

ああその朔風細々として
荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ

ああその蒼空梢聯ねて
樹氷咲く壮麗の地をここに見よ

四

牧場の若草陽炎燃えて
森には桂の新緑萌し

雲ゆく雲雀に延齡草の
真白の花影さゆらぎて立つ

今こそ溢れぬ清和の陽光
小河の潯をさまよひゆけば

うつくしからずや咲く水芭蕉
春の日のこの北の国幸多し

五

朝雲流れて金色に照り
平原果てなき東の際

連なる山脈玲瓏として
今しも輝く紫紺の雪に

自然の藝術を懐みつつ
高鳴る血潮のほとばしりもて

貴とき野心の訓へ培ひ
栄え行く我等が寮を誇らずや

幾世幾年

(大正二年寮歌)

木原均君 作歌

柳沢秀雄君 作曲

一

幾世幾年流れけん
永劫隔つ後までも
洋々声なく野をこえて
銀河に似たる石狩の
岸辺静けき夕まぐれ
導く星を仰がずや

二

巷の塵の跡を絶ち
惰眠をさます雪嵐
毘嵐万里をかけりては
天地もゆらぐすさまじさ
万象淋しく装ひて
蕭々寒き冬景色

三

めぐる月日の尾車や
さざめく小河春告げぬ
あはれ幸ある北の国
緑が丘に打ち臥して
薫る微風身にうけて
常世の春を偲べかし

四

清き真理の渚より
無窮を照らす最高の
天つ光明を探り得て
迷ひの羈絆解きほどこき
闇を排して永遠の
理想の郷を拓く可し

五

一百意気みつ北蝦夷の
健児よいざや奪ひ起て
白き朔風われにあり
曠野に練へし心身も
歌へ壮なる勝歌を
島根に高く勇ましく

我が運命こそ

(大正三年寮歌)

樋口桜五君 作歌
赤木顕次君 作曲

一

我が運命こそ青澗わける
千ひろの海の真珠取り
美想にあこがるる身は
驕楽の春に酔ひしれて
戯る人を夢とはみつつ
逆まく波を聞きゆく

二

永遠に華さく水底ふかく
神秘の巖に嫦娥の
露のしづくの真珠またま
掌に獲し光栄と喜悦と
七重の潮の妙音にひびく
美珠こそわれの生命なれ

三

薫る樹陰に花灰みえて
朧おぼろの春の宵
一壺の酒の汲む夢淡く
心の酔に舞歌を
社会高くしらべ祝はむ
君瑞祥の歳なれや

四

彩雲低く恵の家に
辛漂蕩ひてゆく水や
姿うるほす柳の萌黄
契りゆかしき春鳥の
団欒の音をばうつし伝へむ
遠くはるけき師の君に

時轍乾坤に

(大正四年寮歌)

沢田退蔵君 作歌・作曲

一

時轍乾坤に回り来て
陽春駘蕩のおぼろよひ
紫淡く霞罩め
自治の流れは永遠に
若葉の陰を浮べつつ
吾等が幸を祝ふらん

二

胡馬北風に嘶きて
越鳥南枝に巢を造る
世の濁江に逆へる
棹歌の声の勇ましき
三星霜の春のおきふしに
深き感慨のなからめや

三

柴扉を出でて霜を踏み
川流を掬ひ薪樵る
崇き希望の若人が
歓喜憂苦を共にせし
友悌凋まぬ松柏と
幾千代かけて変らざれ

四

彼の邯鄲の仮枕
栄華の夢も半にて
世の秋風に驚かん
目ざす真理の高殿は
遠く遙けし突進めいざ
心の駒に鞭打ちて

五

ウラルの彼方風凄く
陣雲くらき八街は
鉄騎百万駆りつつ
正義の光失する時
燃ゆる義憤を胸に秘め
起て自治寮の健男児

六

自由の旗を振り翳し
平和の楯を掻き列ね
吾等起つべき時は来ぬ
見よや獅子王一吼して
曠野虎狼の影もなし
祝へ今宵の記念祭

穹蒼高く

(大正五年南寮寮歌)

長崎次郎君 作歌

黒住須賀夫君 作曲

一

穹蒼高く夜は深く

沈黙の森に聳え立つ

桂の梢指すところ

北斗の冴に君見ずや

「吾が若人よ汝が野心

われにかも似て崇くあれ」

二

荒ぶ吹雪のもだすとき

六片の花咲くところ

咬たる天地塵絶えて

塞つる力を君よ知れ

「吾が若人よ北の曠野に

身を練り魂を磨かずや」

三

谷間の百合の香のゆらぎ

楡の若葉に陽はこぼる

春の息吹に渡り行く

時鐘の響に君よ聴け

「吾が若人よ石狩は

自由の郷土ぞ幸多き」

四

百鳥歌ひ花は笑む

美しき国の自治の家に

十一の春今日来る

祝歌たかく君歌へ

「迪に恵ふ若人の

住家よ永に栄あれ」

五

崇きのぞみを星に懸け

鐘に自由を学びつつ

真理を求むる一百の

健児が行手遠けれど

吾若き力強ければ

羸む秋は近からむ

など羸ざる事あらん

荒潮繞る

(大正五年北寮寮歌)

桜井芳次郎君 作歌

橋本吉郎君 作曲

一

荒潮繞る北の郷
絢爛の時に高く
看よ極光に照らされて
夢にまどろむ春の精

二

嗚呼感激の経宮を
矜る血潮に求め来て
十一の年の旦暮は
澄明の府靈清し

三

夏の日悠然に石狩の
浩蕩の水焔めきて
流光高く際涯なき
自然の業を畏れずや

四

夕暮呼ばふ閑古鳥
冥想ここに始めよと
遠鳴くなべも紅葉しつ
稜疊として唐錦

五

北風胡沙に雪を捲き
荒れ狂ひたる戦場の跡
暮れ行く蛮霧に包まれて
白銀の都今静か

六

清けき永久の靈泉の
至福の水を掬ふ可く
黄金の甕守りつつ
調新しく唱はなん

七

智慧の光に導かれ
熱の磅礴に生立ちて
潔き生活の道すら
曲勇ましく唱はなむ

魔神の呪

(大正六年寮歌)

佐藤惣之助君 作歌

植村泰二君 作曲

一

魔神まじんの呪のろひアルペンの
白雪はくせつ永久とほに清きよからず
見よ永劫えいごふと誓ちかひけん
平和へいわの春はるは短みじかくて
吹ふく凋落てうらくの秋風あきかぜに
正義せいぎの光影ひかりかげくらし

二

されど儼然げんぜん東洋とうやうに
その義ぎと侠けふを胸むねにして
燦さんたる北斗ほくと北陸ほくろくの
強きやうと仰あふがれ誇ほこりつつ
自治じちを精神いのちの我寮わがれうは
映華はえある歴史れきし十二年じふにねん

三

嗚呼ああ北海ほくかいの荒吹雪あらふぶき
白箭はくせん膚はだを撃つきくも
胸むねの狂瀾きやうらん青春せいしゆんの
血潮ちしほに如何いかで比ひすべきぞ
力ちからの緒琴を高鳴ごとたりて
紅くれなゐ燃もゆる悶もだえあり

四

残陽ざんやう西にしに茜あかねして
今日けふも暮ゆれ行く手稻山ていねやま
雲くもの五彩ごさいを眺ながめては
思おもひは遠とほく渺茫べうぼうの
彼かの海うみを越こえ山やまを越こえ
雄図ゆうと千里せんりぞ駈はしりゆく

五

平和へいわの流れなが豊平とよひらの
狭霧さきり罩あきめたる朝あさぼらけ
東とう指さして流ながれ行く
涼々そうそうの音ねを我われ聴きげば
瀬々せせの河波かはなみ声こゑあげて
唄うたふ「自由じゆう」の二に字じの曲きよく

六

今宵こよひ榆影ゆえいに団樂だんらくして
月影つきかげに酌しやくむ自治じちの宴えん
廻めぐる盃さかづき夜よも更ふけて
北斗ほくと傾かたぶく玻璃はりの窓まど
いざ吾わが友ともよ熟睡うまひせむ
明日あすは人生じんせいの旅たびなれば

花を褥

(大正七年寮歌)

松本五六君 作歌
峰秀雄君 作曲

一
花を褥の草枕
霞に暮るる野辺の春
ローマの晨ナイルの夕べ
栄華よあはれ夢の跡
傾く月に猶心せず
驕奢に酔ひし人々の
惰睡を破る雄叫や
健児義を取る北の国

三
煙霞曠しき石狩の
荒野に立ちて嘯けば
霜枯れ吹雪く原始の森に
エルゼの歌も微かなり
手稲の嶺に夕陽淡く
宇宙の神秘畏れみて
雄々しき自然に育まれ
雲呼び沖天に翼搏たん

五
薫る春風アカシヤの
情操床しき若人が
崇き希望の象徴と仰ぐ
聖き北斗の瞬に
真理の道の暗示を索め
純しき玉の緒一百を
一つに懸けて結びたる
自治の基礎動きなし

二
世の敗類に神怒り
南の洋に濤さわぎ
腥風荒さびて日暗く
欧亜の文華影消えぬ
堯舜去りて妖雲霽れず
江河氾濫れて未濁る
暴虐無道幾年ぞ
吾等立つべき時ぞ今

四
春の女神の訪れに
花は綻び鳥謡ひ
翠の樹蔭に鈴蘭香り
露の涼しき夏の朝
時雨に漂ふ牧場の紅葉
白雪晴るる冬の景
書読む歳は豊平の
時の流れに恵あり

六
烏兔流光の移ろひて
昔の友は在はさねど
十三年の光栄ある歴史
護り伝へて極限無し
自由の大旆正義の剣
天下の民を済ふべし
戦の場の首途とて
宴の盃いざ汲まん

暗雲低く

(大正八年寮歌)

熊谷巖君 作歌
置塩奇君 作曲

一

暗雲低く乱れてし
怨嗟の声の収まるや
逆巻く波も和み来て
星影淡き東雲に
平和の光朗々と
碧緑の海に輝きぬ

二

さあれ意へば泰平が
やがて醸さん痴惰の夢
人は安佚を偷むとも
我には固き自覚あり
人は驕奢に酔ひしるも
我には尚武の気魄あり

三

夢深かりし曙の
霞にまがふ蝦夷が野に
礎固く営みて
巍峨とそそれる自由の城
浮世の塵を低く睥て
健児の意気を養はん

四

孤城に春の訪れて
楡樹の匂まだしくも
北斗の光燦として
崇き黙示を与ふらん
雪の色にもたぐふべき
潔き節操を思はずや

五

永遠に変わぬ希望もて
理想の華を咲かせんと
険しき世路に逆ひつつ
歩み運びし先進が
光栄の歴史を偲ぶれば
思出多き十四年

六

いざや勝利の盃を
平和の女神に捧げつつ
右手に正義の剣を執り
左手に自由の楯を持し
若き血潮の鳴るがまま
祝ひ謳はん記念祭

無窮の空に

(大正九年寮歌)

戸田早苗君 作歌
藤田篤君 作曲

一

無窮むきゆうの空そらに黎明れいめいの
崇高ただかき姿すがた天翔あまかけり
新あらしき日ひは来きたれりと
万象ばんしやうの歓声こゑひびく哉かな

二

自由じゆうの陽光ひかりかぐはしき
美花はなさく学園そののつじに集つぶとき
青春せいしゆんの日ひにゆるされし
尊たふときたから失うしなはじ

三

強つよき響ひびきの底そこ深ひかく
みなぎる大地だいち踏ふみしめて
虚偽いつはりの世よを破やぶらんと
燃もえたちさかる我わが力ちから

四

生いくる喜よろこび讀きたへつつ
深紅ふかぬまの幻影かげ狂くるひては
陽炎かげろふゆらぐ野のに出いでて
心こころのかぎり歌うたひ舞まふ

五

人ひとのいのちの際はてし涯なき
暗くらき疑まじ惑ひを我胸わがむねに
夕楡ゆふべ影かげに佇たたずめば
北斗ほくとは高たかく輝かがやけり

六

真理まことの宮殿みやの灯ともしび
憧あこがれ仰あふぐ友ともどちが
語かたらひつきぬ感かん激げきに
吹雪かぜ叫さけぶ夜よの更ふけゆくを

七

三みとせ年の夢ゆめは淡あはくとも
長ながき旅路たびちのみちすがら
神くし秘ひの森もりに迷まよひ入いる
尚たかき生いのち命のみことと君きみ知るしるや

生命の争闘

(大正十年寮歌)

青野正男 作歌

小峰三千男 作曲

一

生命の争闘敗れじと
雪解の野辺に萌え出でし
浅緑なる若草の
伸展ゆく生命思ふとき
若き力のよろこびは
我等が胸に溢るなり

二

悲哀誘ふ郭公の
声を聞きつつ逍遙へば
今は小暗き木下闇
黒百合咲けど春いづこ
うつろひやすき若き日を
盧生の夢となすなかれ

三

牧場に虫の音も淡く
仰げば高き秋の空
肥馬原頭に嘶きて
雄渾の気はあふれつつ
崇き理想を胸にして
生くる喜悅謳ふ哉

四

眺めはてなき石狩の
曠野に凋落の秋更けて
寂しく暮るる手稲山
今うすれゆく赤陽に
想ひぞ馳する北欧州
戦禍の跡の夕まぐれ

五

夕吹く風膚にしみ
音も淋しく行く櫂の
大雪原に消ゆるとき
寒月高く冴ゆる夜半
哀愁をこむる若人の
瞑想ぞ如何に深からん

六

嗚呼北州の春秋に
自然の教訓学びつつ
尚き生命に生きなんと
精神を磨く友どちよ
先人建てし自治寮の
貴き歴史伝へかし

起伏しらぬ

(大正十一年寮歌)

牧原東洋男 作歌

高橋北雄君 作曲

一

起伏知らぬ運命こそ
時の流転の弧の上を
あはれ雪解のましみづに
流れて尽きぬ濁流よ

二

未知のひろ野のかぎろひて
輝くまでに萌え出でし
若き草木のさゆらぎに
春深き日の逍遙や

三

澄みて雲なき空と野を
かぎりて走る山並に
高き心のをのきは
躍る血潮の真夏日陽よ

四

銀の香炉にしのび雨
楡の繁みに交らへば
大地も傾きて
命かなしき秋なれや

五

夜毎にさゆる窓の星
闇行く櫓の鈴の音に
真理の水の人掬
求めてやまぬ瞑想よ

六

深き安息の夢やすく
げに憧憬の地やここに
芸術の壺ぞただよへる
自由の精ぞみなぎれる

かがやく路

(大正十一年新寮記念寮歌)

—— 新築された寮のために ——

服部光平君 作歌
山本吉之助君 作曲

一

かがやく路のさすらひや
魂の聖なる石狩の
色華かなるあけぼのの
揺籃に歌ふ若人は

二

夏の林に流れわたる
いのちの野火のおき伏の
愛の栄えは香盤に
感激ふかく胸をゆる

三

秋の狭霧の野を越えて
時の進みのみちすぢに
鐘の音聞けば今更に
あはれ高鳴る吾生命よ

四

永遠になみうつ白銀の
神秘を語る冬の夜に
空色の国星の国
沈黙に曳ける追懐よ

春雨に濡る (大正十二年寮歌)

高橋北雄君 作歌
西田貫道君 作曲

一

春雨に濡るアカシヤ花
街路の灯はなやかに
地は銀鼠にたそがるる
寂かに歩む若人が
心にめざむ爽かの
瀧み充てる力かな

二

夏の入陽に砂丘の
狷虎の骨に鷗飛ぶ
融けざる銀の山脈は
碧薄れゆく空にうく
名残の光身にあびて
異郷の方を思ふかな

三

灰青白き白樺や
落葉ふむ音寂しくも
谷また谷を辿り行き
今宵は淡き夢見んと
焚火を囲み歌ふ寮歌
紫紺の闇に解けて行く

四

青き空透き銀の月
石狩の河波光る
雪の野限は霽こめて
灯漂ふアイヌ小屋
琥珀の酒を汲み交し
王者の誇偲ぶかな

茫々はるか

(大正十三年寮歌)

高野芳雄君 作歌
神島辰雄君 作曲

一

茫々はるかに緑に炎えて
石狩原頭美の香に酔えば
高鳴りあふるる若人の血や
ああこの霊の憧れの地に
曙光に輝く黎明告ぐる
鐘を撞かばや

二

真紅に熱せる入陽は沈み
黙思の歩みを運ぶ夕宵は
エルムの繁みの梢透かして
夕映流るる黄色の彩に
生命の窓をば疾く開け放ち
霊気吸はずや

三

地平の際涯によしや吾等の
感激は沈めど彼方はるかに
思索の曠野は尽せぬなれば
石狩河岸に友よ佇み
野生の律べの秘奥を求め
真理を聴かん

四

寒風荒びて吹雪吹く夜も
榆林に洩れたる四寮の燭光
生命ぞまたたき青春の日の
灯累りて永遠に輝く
ああ其の灯かけに霊と血潮の
籠められしかな

五

昔を偲べば吾等が寮は
原始の茂森に生める自然児
不断の船路に彼岸めがけて
自治への歩みは十九星霜
自由の栄に友よ奏でん
平和の序曲

敝れし衣

(大正十四年寮歌)

外山徳次郎君 作歌
三溝清美君 作曲

一

敝れし衣の袖に散る
不香の花の小夜嵐
淋しく強く生きぬ可く
手稻の峯に響くかな

二

送る梅花の芳せに
熱腸しほる杜鵑
誘ふ春風恨みては
散るも惜しまぬ山桜

三

きのふぞ移る秋風に
草木悲歌を奏ひつつ
月の面ゆく鳥の影
故山の空に微み行く

四

駄鞭荒野に打ふりて
赴くや皇土の城の外
青山我が有に帰し
緑水我を弔はん

五

国に誓ひし丈夫の
夢中原にさまよひて
仰ぐみ空にまたたける
北極星のかけ清し

大地はなごやかに

(大正十四年開舎二十周年記念寮歌)

黒沢徹君 作歌
三溝清美君 作曲

一

大地はなごやかにうるほひて
丘陵の傾斜の若草や
さゆらぐ楡の嫩葉にも
春新生の精気は溢る
原始林の緑に流れ来る
嗚呼青春の讃歌

二

色紫の彩絹に
染めて溶けたる朝霧の
悠久の蒼穹はるかにも
濃き水色にうつろへば
白鳥高く海に飛び
入江の波に夏陽は映ゆる

三

連嶺紅に黄昏れて
夕靄流る水沼の
白き葦穂波に顫ふ月
幽暗の草野に訪づれば
仄かに響く胸うち
高遠き感激に逍遙ふ哉

四

神秘の森林に群星さえて
雪の曠野遠く静謐なり
銀壺にゆるる灯に
崇き教訓を胸にして
心の憧憬郷にまどるする
若き人等の哀歓よ

五

陽炎ゆらぐ春の日に
落葉しぐる秋の夜に
胸に高鳴る青春の
若き誇りを歌ひつつ
限れる生の瞬時を
深き瞑想到過ぎずや

ああ青春の歡喜を (大正十五年寮歌)

木村左京君 作歌
牧野千代治君 作曲

一

ああ青春の歡喜を
宴の酔ひと言ふは誰れ
我が行く方の遠ければ
しばしこの舎に憩ひして
草を茵の旅枕
明日の旅路を夢に見ん

二

曠野に萌ゆる若草の
しらべゆかしき喜びを
そよ吹く風に寄するとき
うららかに照る春の日は
霞の奥にまどろみて
光の波は野に充てり

三

故郷の空は見えねども
ただ野は広く路遠し
彼方の国に孜々として
歩みつづくる行人は
行手の空に湧き出づる
光の雲を如何に見る

四

望の光見えざれば
世は永劫に常闇か
我が清純の魂の
撓まぬ旅は麗しく
頑迷の徒も起き出でて
我等の群に加はらん

五

あはれゆかしき人の世や
夜ふけの街を歩みつつ
遠き北斗の星を呼び
友も歌へば我も和し
来るはここぞ森の奥
光まばゆき自治の燈

爪紅の黎明の風

(大正十五年開学五十周年記念寮歌)

井上哲郎君 作歌
河口忠雄君 作曲

一

爪紅の黎明の風
白羽簾へる若武者が
青春うち慕ふ風情あり
赤き血潮の溢れては
北溟の城花も散る
香ふ二十を愛しむ哉

二

いとすら若き鰭を
逆巻く潮に浮べつつ
宿命の羈絆解きうてば
無量無限の陽光に
真白き鳥のゆく如く
北海の奥の流離よ

三

ああ黒潮や、さざれ床
いるかの夢に身をひそめ
郷愁空に盃もなく
熱ある友を求めては
溢るる涙袖うちて
吾等が寮歌を合むなり

四

淡紅の花陰に
裸形の友も集ひして
生くる力の征矢ひけば
牧羊神も醒めつらむ
孤雲の彼方はるけくも
胸うちふるふ希望あり

五

されど悲恋の跼蹐は
浩蕩雲にむせびけむ
断腸を撞かむ巨鐘の
鐘樓の夢やいかなれば
嘆かひ濡るる月魄に
秘めにし曲をつたへずや

六

嗟呼青雲を吟じなば
月毛の駒に星止めむ
秋水義に反きては
破波の想堪へがたく
酒盃にむせぶ白雲の
乱るる醉歌に恨みあり

七

大熊星のさすほとり
快樂の濁舟ひくく見て
舞ひつ歌ひつ白羊の
あこがれ楡の駅路に
自由の泉青春を
うち連れ汲まん誇り哉

蒼空高く翔らむと

(昭和二年寮歌)

土井恒喜君 作歌
長谷川吉郎君 作曲

一

蒼空高く翔らむと

暫しやすらふ楡の蔭

力は胸に溢れつつ

翼つくろふ思かな

四

若きに芽ぐむ数々の

深き苦悩は身にあれど

迪を恵ねて辿りゆく

遊子の真意君知るや

七

花咲き散りて五十年

寮庭の桂も年ふりぬ

先人の影とほけれど

遺訓や永久に薫るらん

二

朝曠野の露を吸ひ

夕北斗の曙きに

驚き眩る幼鵬の

清き眸君見すや

五

茫茫千里石狩の

野は澄みわたる銀の

雪さんらんと散るところ

われらが魂の故郷かな

八

北溟城の生活に

桜と星の旗かざし

相寄りむすぶ三百の

志は高きわれらかな

十

ああ碧落に永劫の

北斗の光かけさえて

清き三年の思出の

銀觴の酒つきざらん

三

うら若き日の悦びを

はかなきものと誰かいふ

理想の潮湧き出づる

生命の海の高鳴るを

六

若き勇者よオキクルミ

熊をはふりて饗宴せし

短檠すでに光消え

東の空はかぎろひぬ

九

こよひ手稲に日は落ちて

新月細くかがやけば

青き煙のそが中に

ほがらかになる楡の鐘

郭公の声に

(昭和三年寮歌)

古河勝夫君 作歌
宮本正治君 作曲

一
郭公かつこうの声こえに迷夢めいむの夜よは明あけて

紫紺しこんの雲くもの色いろも褪はれぬゆき

春芝草はるしばくさに風かぜのそよげば

旭光ぎよっこうは見みよ東雲しののめの沈黙しじまを破やぶり

自然しぜんの精姿すがた紅あけに揺ゆらぎぬ

讚たたへなんうら若わかき日ひの

朝あさの神秘くしひを

二

濃緑こみどりに原始げんしの森もりの茂しげる候こう

君影草きみかげくさの花はなも散ちり果はて

クローバくろーばの上うへに胡蝶舞こちょうまひ舞まふ

蒼空さうくうの小鳥こどりを追おふか陽炎かげろふ立ちて

牧場まきばに悠ゆるき牛うしの声聞こえきく

仰臥ぎやうくわせる牧童わらべの上うへに雲くもは動うごかず

三

俊巖しゅんげんの秋気しゅうき何時いつしか野のに充みちて

可憐いとひしし虫むしの音ねもものを思おもはず

移うつろふ自然しぜんの色いろ彩あざ賑にぎはへど

沁しみ々と人ひとの運命さだめの秋あきも偲しのばれ

淋さびしき哀愁うれひに涙なみだにじみて

蕭々しょうしょうの夕風ゆうかぜいとど身みには惱なやまし

四

銀月ぎんげつは今雪原いませつげんの上うへに照てり

エルムえるむの梢こすゑ淡青あをく映うつりて

野末のすえに籠こむる夢ゆめの狭霧さきりの

奥深おくふかく幻想まぼしの燈火ひの明滅めいめつを見るみ

凍こらんとする靈気れいきかすかに

一条ひとすぢの櫓路そりぢに残のこる鈴すずに震ふるへり

五

丈たけなせる草踏くさふみみ分わけて蝦夷えぞケ野のに

迪たちを恵たづねし人ひとの姿すがたよ

さ迷まよひ暮くれて星仰ほしあおぎけん

ああそこそこに原始げんしの影かげは更さらに薄うすれて

老おいし楡エルムに嵐荒涼あらしすずびつ

夕陽せきやうは手稻ていねの背淡紅うしろあかく映うつせり

六

白樺しらばよポプラ並木なみきよアカシヤよ

春秋はるあき三度廻みたひめり去さりなば

若わかき生命いのちは疾いくに萎なえ果はて

逝いにし日ひの宴遊うたげの宵よい

夢ゆめも追おひ得えじ

此このの経営いどうに思想おもひ分わかちし

寮友ともしちよ心こころの記念かたみ永久とわに謳うたはん

黒潮鳴れる

(昭和四年寮歌)

須田政美君 作歌
森忠文君 作曲

一

黒潮鳴れる滄海越えて
際限無き春を北州に訪ふ
原始の大森に八光揺ぎ
若草の曠野に羊群遊ぶ

二

情懷は朧月に仄かに薫る
アカシヤの白花慕ひて歩む
恋ふる往昔の静寂けき名残り
古塔にひびく懐しき鐘

三

紅光うすくエルムに映えて
草笛かそかに牧場になる
漂泊らひ行ける白雲影仰ぎ
無心の若人らは緑に臥せり

四

果無き憧憬銀河に寄せて
玻璃永劫の清き夜空を
神秘の皓翼声なく衝ちつ
我等が高夢は流れゆくかな

五

淋しき風声に銀雪は乱れつ
大空鳴りて渾眼く暮れゆく
燦めく灯影常春の謳歌
血潮と共に尚湧き立てり

六

久遠の絢夢はうづもれゆきて
哀愁時にしづかに来れど
雄き「自然」と「血潮」の人は
檜陵に永くうつくしく立つ

嗚呼青春の

(昭和五年寮歌)

児山信蔵君 作歌
有村徹君 作曲

一

嗚呼青春の夢高く

理想のあとに憧憬れて

楡の花散る学都にぞ

啓示を求む若人は

綺花を流して逝く水に

十九の春を嘆くなり

三

学堂の古鐘の沈みゆき

楡陵の蒼空に銀月冴えて

羊の群の片影もなし

沈黙の原始林に散りしける

落葉踏みゆく雄き子は

三年の絢夢に涙する

二

牧場の緑草踏みしだき

栗毛の駒に鞍置きて

うち振る鞭の音も高く

希望の天空を朗らかに

寮歌を歌ひつ眺むれば

白雲流れゆく手稲山静か

四

疎林のほとり夕陽は落ちて

閑さへも絶えし真夜に

涯なく白き石狩の

銀雪に連なる曠野の静寂

震はせ乍ら橈唄は

神秘の闇を縫ひてゆく

五

北斗は遠く七星消し

「妄執」の現世を見下して

真実一路の迪恵ぬ

「意気」と「血潮」に生くる子の

瞳に燃ゆる紅焰は

永遠なる生命の証なり

平和の光輝ける

(昭和六年寮歌)

広瀬英三君 作歌

金景洙君 作曲

一

平和の光輝ける
春末だ浅き曙に
綾なす紫雲を分け出でて
彩色られ行く青春の
久遠の迷夢を求めつつ
声高らかに歌はなん

二

陽光燦然乱れ入る
夏の窓辺に書よめば
寮庭に年経るアカシヤの
床しき薫香漂ひて
いつか心懐の極みなく
蝦夷の昔にいたる哉

三

秋も闌け行く北溟の州
白楊の華乱れとぶ
聖き都に寂寥の
静かに迫る此の夕べ
思索の迪を恵ぬれば
榆林に鐘はなり響く

四

馬櫓の鈴の音も絶えし
雪の大路を歩みつつ
声をかぎりに寮歌うたふ
凍れるものみな揺かして
星斗は高く冴ゆる夜の
大空のかなたへ消えて行く

五

高き「理想」と「純情」に
たぎる生命を託しつつ
憧れ集ふ若人の
情熱のかがり火打ち囲み
月下に酌むや榆の宴
いざや謳歌へん記念祭

別離の歌

(昭和六年閉寮記念寮歌)

大槻均君 作歌

中村小弥太君 作曲

草木そうもくすらと時にとき悲歌ひかを嘆たんず、永劫えいごふの時の流れながの尽つきざるに、
人の世よの凡すべての何なんぞはかななき。
懐なつかしき友ともよ、
彼の寮れうを思おもひ浮うかべて心静こころしづかに「別離べつりの歌うた」を奏かなでん。

一

高遠たかきを誇ほこる自治寮じちれうよ
星永遠ほしとこしへに流ながれては
春秋しゆんじゆここに二十六にじふろく
逝ゆきて帰かへらぬ春風はるかぜを
恨うらむ今宵こよひの若草わかしほの上うへ
これ先人せんじんが夢ゆめの跡あとかな

二

移うつろふ世習せしゆい泣なくは誰たそ
原始げんしの森もりに咲さく枝えだを
手折たをりて結むすぶ友垣ともがきが
燃もゆる生命いのちのかがり火びに
光ひかる瞳ひとみは幸福アストラ星はか
強つよく正ただしく友ともよ生きなむ

三

明日あすの宿居やどりは知しらねども
吾われに友ともあり、吾強われつよし
降ふる苦難くるしみをともにせん
誓ちかふ心の酒杯さかづきに
尽つきぬ名残なごりの涙なみだする
今宵こよひ限かぎりのこの宴うたげかな

古城の春は

(昭和七年寮歌)

大槻均君 作歌

中村小弥太君 作曲

一

古城の春は古い易く
延齡草の名に問へど
流転の法は断ち難し
友よエルムの鐘を聴け
再建の秋程なけん
ペルアスペラと鳴り響く

二

今移り来し原始林の蔭
宿るは未だ浅けれど
契は深き二百の
心を交はすこの宴
暁かけていざ撞かん
アドアストラの自治の鐘

三

妖雲西に漾へど
視よ落日の悠々と
大地を旋り淪むかな
眠る此の城吾も亦
醒めての生命培はん
四大の荒び明日あれば

四

厳寒凍る極北に
霧立ち騒ぐ曙の
光を担うて起たんと
際涯もなく寄せ返す
世紀の波濤は狂へども
既倒にかへす力あり

五

竜蛇岸打つ大洋の
今人生の船出かな
白帆高くはためきて
正気をはらむ若人の
理想の船は不壊にして
さかまく苦海を永遠に航く

タンネの氷柱

(昭和八年寮歌)

卜部清君 作歌
白石祐義君 作曲

一

タンネの氷柱消ゆる頃
胡蝶は眠る花の宿
牧場に結ぶ夢遙か
青き希望の雪峯こえて
四海に羽振る若鵬の
石狩を立つ意気をみん

朝里の丘に烏頭咲けば
蝦夷が芙蓉の雪とけて
千尋の懸崖ゆくだけ入る
恐路の沖の真白帆に
万里の波濤翔らんと
白鷗はしばし憩ふなり

三

真紅の夕陽山の端に
もゆる紅葉をかざしたる
友がゆくての野を遠く
幌馬車の影消え去りぬ
蓬髪胡風に靡けつつ
懐情は尽きず果てもなく

十勝の峰に捲き起こる
吹雪怒りて咆ゆる夜も
旭光東に色めけば
熊追ふ愛奴の雄叫びに
大雪原の靈光や
無絃琴の音を高し

四

懸る垂氷に月くだけ
千々の瞑想は来し方の
六十の秋はしるくして
緑に浮ぶ白亜城
苔むす楡鐘の哀調きけ
若き力を求むなり

五

津軽の海

(昭和九年寮歌)

星勇君 作歌
白石祐義君 作曲

一

津軽の海渦巻ける奥

オホツクの寒潮咆哮えて
雄健き名ぞ蝦夷が島根に

年古りし恵迪の寮
旅寝とな言ひし三年を
揺籃の高夢を追ふなり

三

清明の水に浮べる

宵月の影はさやけし
酒觴をめぐらしかさね

熊熊の声聞くもすべなし
たぎりゆく若き血潮に
限りなき感激をしたふ

二

寂寥の歩行はこびて

茂みさぶる森に仰臥し
先人の詩になぞらへ

陳腐なる歌を恥ぢらふ
ただ仰げ自然の姿
そは深き黙示をきさむ

四

六十にも齢うつろひ

集ひたる寮友は兄弟
伝統の永遠の記念と

感激の寮史も成りぬ
情懷深く唯魂が
魂と結び輝く

五

恵迪の館を訪ひし

竜田姫佐保神三たび
若人の生命捧げし

想ひ出の自由の宴遊
永劫に若き一日の
夢とせむ楡鐘の調べを

六

黎明は曠野の際涯

雄叫びと共に来れり
満蒙の長夜の闇も

晴れんとす起てよ寮友
青春の象牙の塔を
いさ出でむ時は到れり

七

北溟の自治の牙城を

蒼穹高く巢立つ寮友
澆季の世救はんは汝れ

濟世の烽火あぐべし
忘れ得ぬ恵迪の歌
高唱ひゆけ正義の大道を

噫妖雲は

(昭和十年寮歌)

川村真君 作歌
荻野辰夫君 作曲

一

噫妖雲は狂へども
みちもと わこうどら
迪を恵めし若人等
ぎぜんしれう たてこ
巍然四寮に立籠もり
かくせい うたうた
覚醒の歌高誦ふかな

二

三年の契浅からず
らんまんはる あざむ
爛漫春を欺けど
ぎんしやうくち
銀觴口辺にうつろへば
なしり はる をし
名残の春を惜むべし

三

羊の群は去り行きて
ひつじ ぐれ さき ゆ
つのがえしほ
角笛遠くこだましぬ
なつくさか をかのへ
夏草深き丘上に
つきさんかう かげさ
月三更の影冴ゆる

四

不壊の生命と輝きし
ふゑ いのち かがや
みどりやうや
緑葉漸く紅葉して
いまれいろう けいこく
今玲瓏の谿谷に
わか お こ
若き男の子の寮歌消ゆる

五

颯々の風音寒く
さつさつ かぜおとさむ
そり ねこげん つきよ
橿の音孤弦の月を呼ぶ
まど たたず
窓に佇む多感の遊子
こよひなに おも
今宵何をか思ふらん

六

月影淡き楡の陵
つきかげあは ねれ をか
きねん まつりをほ
記念の祭終るなり
かがりびた われ いま
篝火焚きて我は今
しづ よひ うた
静かに宵を誦はなん

嗚呼茫々の (昭和十一年寮歌)

六戸昌夫 作歌
村岡五郎君 作曲

榆陵謳春賦

われらが三年を契る絢爛のその饗宴はげに過ぎ易し。然れども見ずや穹北に
瞬く星斗永久に曇りなく、雲とまがふ万朶の桜花久遠に萎えざるを。
寮友よ徒らに明日の運命を歎かんよりは、榆林に篝火を焚きて、去りては
再び帰らざる若き日の感激を謳歌はん。

嗚呼茫々の大曠野

先人ここに芟りて
建てし自由と自治の城
その源は遠くして
濁世叱咤す六十年の
苔むす青史誇りなん

二

老桜の蔭や北辰の下
少時旅寝の若き子が
自治燈かかげ聖鐘うちて
惰眠れる魂を覚醒すべく
降魔の剣かざすとき
狂へる颯も声ひそむ

三

さはれ今宵の我が寮
「人生意気」に集い来し
結びとけぬ友垣が
光明と權威謳ふとき
星屑原始林に輝きて
流転の相を示すなり

四

ああ感激の美酒は
廻りて早きその三年
希望の光恵めては
榆林にかはす盃に
啓示の翳を泛べつつ
男の子の眸に涙あり

魂の故郷

(昭和十二年寮歌)

山崎善陽君 作歌
平城鷹雄君 作曲

一 魂の故郷に立つ

たましい ふるさと
ほしきよ エルム その

星清き 榆の園よ

はなはなほ さんしゅん ゆめ
花芳る 三春の夢

かんげき なみだ
感激の 涙あふれて

も わか
原始林蔭に 盃かはす

うた うれ
青春き日の 記念の宴

歌ふなり
自治と自由の高き誇を

二

むそとせ せいし かを
六十年の 青史は薫り

くわくこう こゑ
郭公の 啼声もはるかに

こんじやう そろ
紺青の 入相の空

たましい は
魂は 虚空に走せて

ふるきよよ
住昔の 意気を慕ふ

つ つか
尽きる なき川のせせらぎ

ゆめ
夢ふかし

さんしゅん なみき
残春あはきポプラ並木よ

三

いで 湯湧く郷の宴は

よもす ながら 感激はてなき

けんらん ひどき ゆめ
絢爛たる 瞬間の夢

からまつ しら
落葉松の 林時雨れて

しうしう ひか
颯々の 悲歌の調べは

かかね やみ
楡鐘の 響と闇にきえゆく

さびしらに

あきふか しじま
秋深みゆく 静寂の都

四

へうへう あらし
颯々の 暴風おさまり

はくしし ぐわや
際涯なき 雪の荒野に

かうかう つきかげさ
皎々と 月光冴ゆる

そり ね
橇の 音の玻窓にこぼりて

かき おもひ
限りなき 瞑想をさそふ

いとう なが
悠久の 時の流転

人の 世の

かな きだめ あす
悲しき 運命ぞ明日の旅路は

五

曠野に 高嘯ふ 恵迪の 健児

きぜん わか
毅然たり 若き 生命よ

せんじん たか おしへ
先人の 崇き 訓戒に

おほ せい
大なる 野心 育む

がいせい うれひ
慨世の 憂は あれど

しほ いこひ
ここ 暫し 休息も ためて

いざ 寮友よ

のこりの 春を 惜しまざらめや

春未だ浅き

(昭和十二年第三十回記念祭歌)

平城鷹雄君 作歌
穴戸昌夫君 作曲

一

春未だ浅き白楊の

雪解の小路たたずめば

しばし聞けとて私語の

木の間もれくる夕嵐

二

あはく足げに咲き出でし

おぼろおぼろの水芭蕉

なつかしの原始杜肩とりて

楳火をめぐり歌はなん

三

長髪頬に戯むれて

昔変らぬ風なれや

今したたへん三十回の

青史をかざす記念祭

四

美酒の夜は更け行けど

尽きぬ男子の黒潮を

契の杯に汲み交はし

常緑を祝ふ自治の宴

津軽の滄海の

(昭和十三年寮歌)

二階堂孝一君 作歌

高橋寛君 作曲

一

津軽の滄海の渦潮わけて
雄大き想ひを北斗に馳する
若き情懷は北溟の自然に
抱擁かれて今野心培ふ

二

アカシヤの白花散り敷く夕べ
白銀の月仄かに浮ぶ
牧場添ひの野路逍遙ひゆけば
羊の群は声なく去りぬ

三

石狩の平野に爽夏訪れて
原始の大森は緑影も小暗し
郭公の朗声静寂に徹り
清涼しき朝の熟睡を破る

四

豊穰の秋の讃歌を奏で
ポプラの高梢さやかに揺ぐ
北溟の蒼穹紺碧に透き
生の歡喜我が胸懷に充溢つ

五

飄々の風声疎林に沈潜み
無眼の静寂天地に充滿てり
寒月は鋭利く虚空を截りて
我が行く孤影よ霜に凍りぬ

六

白銀の六華莊嚴に咲く
山嶺奥深く彷徨れ行けば
ああ壮麗の樹氷の森よ
冬の神秘に我が胸戦慄ふ

七

さあれ戦塵東亜を閉鎖し
全支の空に硝煙昏冥し
大陸飛翔る荒鷺想へば
雄心湧きて若き熱血滾る

八

先人の絢夢残れる原始林に
寮祭の犠牲の火柱廻りて
いざ寮友どちよ永久に謳歌はん
意氣と血潮の三年の契り

時潮の流転

(昭和十四年寮歌)

望月真三郎君 作歌

竹村伸一君 作曲

一

時潮の流転涼々と
四季乾坤に巡り立つ
去来常なく人変り
有情無為の時鐘の音に
孤城の爽春は未だ浅し

二

遠く流離の春に来て
此の高楼に春愁ひつつ
郭公鳥の鳴くさへも
多感の児等の情懐熱く
懐古の涙溢るべし

三

真日澄む北の蒼穹はるか
飛燕ひとたび音に鳴けば
桃李の華影は瘦せゆきて
あはれ旅寝の若き遊子よ
帰南の郷愁しきりなり

四

夕陽西に落ち行けば
白樺林朱に染み
暮秋の颯は飄々と
時艱を憂ふ国の子の
悲腸の声に似たるかな

五

北斗地平に揺曳ぐとき
天地の四大霜と凝り
四寮の高夢も凍てつきて
ほがらほがらの朝ぼらけ
帰雁の孤影よ月に飛ぶ

六

明日別れ行く旅人の
春の夕べの宴遊かな
かへらぬ絢夢をしのびつつ
生命の故郷と慨嘆きしも
すでに三星霜の草枕

弥生の空に

(昭和十五年寮歌)

大井徹夫君 作歌・作曲

一

弥生の空に消え残る
霞に春の絢夢閑けて
露に春の絢夢閑けて
前途を祝ふ花吹雪
友情の盃を交しつ
北斗の光身に享けて
仰ぐ健児の影清し

二

手稲の山に陽は落ちて
広き蒼空の茜雲
「我立たずんば」の意気あれど
昇天の機を小百合咲く
静けき故郷に憩して
暫し臥竜の夢に見む

三

春雨煙る並木路に
輪廻の相俣びては
露置く花を愛しみて
遠き思索に逍遙へば
緑の牧場眼に著き
野路は果てなく黄昏れぬ

四

究理の道は遠くとも
研磨の窓に月匂ふ
白魔曠野に狂ふとも
明日は希望の太陽笑ますや
正義の大道濶歩する
熱血男児ここにあり

五

光かそけき原始林蔭の
月に散り布く花蓆
エルムの精も踊るてふ
記念祭の歌は餅して
永世を寿ぐ篝火に
歡喜の夜は更けゆきぬ

六

不壊の智玉を育みて
恵迪ここに早二年
静寂の楡鐘に眼をやれば
見よ東雲は輝けり
いざ船出せむ波濤越えて
嗚呼人生の朝ぼらけ

湖に星の散るなり

(昭和十六年寮歌)

切替辰哉君 作歌
岡田和雄君 作曲

一

湖に星の散るなり幽けさよ松の火燃えて
漕ぎ出づる愛奴の漁舟の岸辺佇ち沁々眺む
旅の日ははや暮れゆきぬ夢に酔ひ夢にぞ歎かん
汚れなき心を慕ふ大いなる支笏の湖よ
花若く我汝が許に希望満ち今宵宿らん

二

轟けるかの雄叫びよ創造の歷程一路
新しき使命に捧ぐ幸の今日にしあれば
忍苦して欣求むるところ得べくして得べからざりし
秀麗はしきまことの道ぞ近くして遙かなる哉
若き世の秩序を背負ふ洋々の日と俱にゆかなむ

三

乾坤に伏し祈るなり栄光あれ祖国の生命
決意する光眩ゆく手に取りぬ楡の嫩葉
葉脈の強きを讀ふ草々のたふれ生れて
春青み辛夷咲くなり逍遙の原始林蔭清く
暢び行かん我が民族の逞しき息吹き感じぬ

四

立て歩め光の中を国民の重き責任負ひ
燦めきの星辰は語らひ微香る大地 囁きぬ
甦生へる征覇のいくさ祝歌ふ吾等が双頬に
失はじ高きが矜持護り来し伝統の法火
浄らかに燃え熾る刻継ぎ行かな来ん若人に

春來にけらし

(昭和十七年寮歌)

橋爪秀雄君 作歌
李子一雄君 作曲

一

春來にけらし白雪の
厚き衣や重からん
綾羅の糸も綻ろびて
朧々深き五月闇
楡影揺めく鼙鼓の音に
夜霧に蒸せる緑酒汲み
挙りて踊る楡の精

二

草茅しげき原始林かげに
聖き焰を囲みつつ
若き情熱は求むれど
人生誰かよく解かん
ただ真なる愛に泣く
寮友の姿の清ければ
春宵の罪と誰か言ふ

三

春秋糸も限りなく
文月の夢は織女星の
あはれ手稲の衣かな
山の端深くたそがれて
今宵銀河の祭日の
永劫の空を眺むれば
天空流る星一つ

四

雨月の濁流滔々と
豊川に聞く世の憂
泥潦沈み真清水の
流るる秋は見ざるとも
墳墓の土を清くせん
戦の庭を高らかに
七つの海の潮音よ

あますなく拓きゆく道

(昭和十七年大東亜戦争頌歌)

切替辰哉君 作歌
池田政晴君 作曲

一

あますなく拓きゆく道

天雲の向伏す極み

地の涯ゆ、征かむ御楯と

大詔もち、我等日の族

源泉のごと湧きたたむ

誇らかに諸声に

血潮流さむ

二

どよめきぬ祖霊の行

六合に頸く漲ぎり

天津日は紅燃ゆる

南方圏の洋路遙けく

秀麗しき創成の神意

重く負ふに務めして

生命たぎちむ

三

帰るなき発程に起つ

眸澄める我等若人

皇国の道に挺身まん

諸共に雄叫びすれば

叫び和す新潮の声

抒情清か、白鳥の

海図に夢む

四

ここぞ茲、いかで忘れむ

日に若き、恵迪の児よ

たどり得し道の感喜

溢れつつ、ほの認めけむ

仰ぎ見る銀漢のほとり

真実もて、弥生ひに

継ぎて行かなむ

一

悠久の天詔琴

今ぞ時、轟き赴きぬ

高かき剣を植ゑて

荒魂の魂にぞ生きむ

遷るべく遷る亜細亜の

峻しかる大いなる

秋に生れし

二

欣求の宇宙蝕変満つも

東亜の空、復円光らん

斯くせずばやまぬ宿命と

十億の健剛を禱みて

国挙り歩みゆくなり

熱涙もて仰がなむ

黎明の幸星

三

敵かの時の流れに

新しき力よ躍れ

鮮けき翳りの中に

新しき叫よ拳がれ

胸臆朗ら、身を透けて佇つ

揺ぎなく、鍛へして

先駆に埋めん

四

ここぞ茲、いかで忘れむ

日に若き、恵迪の児よ

たどり得し道の感喜

溢れつつ、ほの認めけむ

仰ぎ見る銀漢のほとり

真実もて、弥生ひに

継ぎて行かなむ

天地の奥に

(昭和十八年竄歌)

橋爪秀雄君 作歌

池田政晴君 作曲

一

天地の奥に征く吾や
孤杖無限に旅立ちて
溪巒はるか訪ね来し
榆陵の宿や三春の
旅にしあれどそは深き
噫魂のふるさとか

二

四大も夢む幌のさと
歌の心を温ぬれば
穠り床しきアカシヤの
花灰白き憂あり
夏宵の霞霰びきて
月皎々の滄海をゆく

三

大空風に咽ぶよひ
暮鐘は低く漂ひて
荒野は凋落の悲歌に泣く
栄枯は移る秋の日の
秋思の歩み運ぶ夜半
久遠の星を仰がずや

四

高き理想は人の世を
人の世と生く侘しさに
坤球鳴りて吹雪き狂ふ
孤高の峯に伏する今
浮生の夢は消え果てて
心虚しき歡喜よ

五

北溟春は浅けれど
森かげ清く黄花咲き
雲雀は高く空に入り
新生の合唱野に満てり
古衣を重ねる日は逝いて
時乾坤に春よ立つ

六

いざ浩歌はなん天壤の
栄ゆる時ぞ益荒男の
事ふる道は烈しかる
今宵祭の聖き火に
尊き誓ひ立てよかし
興亡分るる秋なれば

雪解の榆陵の

(昭和十九年寮歌)

鈴木信夫 作歌
竹山賢治君 作曲

一

雪解の榆陵の一流や
岸辺に憩ふ水鳥の
孤影ぞしばし春の水
面
ああ石狩の天空晴れて
轟け謳ふ恵迪の
児等が生命や聖からん

二

歡喜憂苦を共にせむ
結ぶ契の盃に
松の枝漏るる月影や
人生意気に感じてか
集ひし雁の行く手稲
青雲の峯巍峨の峯

三

いざや伝統の聖火を翳し
先人の絢夢偲びつつ
寮祭の庭に四十回の
春風頬涙を乾すなれば
散りゆく夜迷雲のかげ消えて
声を限りの感激かな

四

南の海の有明に
燦く星辰の消え果てて
散りぬる若桜もあるぞかし
いかで我等の蹶起ざらん
義憤が胸にほのぼのと
染め映えにし朝日影

五

噫世は変遷り人変り
館の原始林は愁へども
剛毅の大旆仰ぎてし
熱血燃ゆる益良夫が
皇国の道に挺身まんと
誓ひし眸に光輝あれ

生命の旅路

(昭和二十年寮歌)

幸坂彪君 作歌
新井忠雄君 作曲

——輝かしき前途のときに——

一
流転永世の旅衣
四大(だいだい)の神秘(くしびと)尋(たひら)はんにも

若(わか)き生命(いのち)の寂寥(さびしら)に
遠(とほ)き真理(まこと)の暁(あけぼの)星(しほ)一つ

起(おき)伏(ふ)し
知(し)らに慕(した)ひゆく
孤(か)影(げ)簫(しょう)々(しよう)の荒(の)野(の)に消(き)えぬ

清(きよ)き友(な)さけ情(け)を先(せん)人(じん)の
忍(にん)苦(く)染(し)み映(は)ゆ楡(え)が枝(え)に

二

懸(か)けて団(だん)欒(らん)す一(ひと)刻(とき)の
玻(は)璃(り)が盃(つぎ)の面(おも)茜(せ)雲(うん)漂(ゆ)らぎ

胸(むね)琴(ふ)触(ふ)れ合(あ)唱(うた)ふうつそ(そ)み(み)の
塵(ちり)世(よ)の濁(な)がれ流(ながれ)ひた超(こ)えて

三
寮(まど)窓(ど)辺(べ)に泣(な)くや人(ひと)性(さが)の
運(さだ)命(めい)の羈(お)絆(は)固(かた)ければ

愛(あい)と誠(まこと)に身(み)をせめつ
高(たか)謳(うた)ふ哉(かな)美(み)し青(あ)春(はる)の

剛(ごう)毅(ぎ)の陰(かげ)の淨(な)涙(なみだ)をば
白(しら)珠(たま)碗(わん)に掬(むす)ばなむ

秋(あき)闌(た)く原(も)始(り)林(りん)のう(う)ら寂(さ)びて

四

愛(あい)智(ち)の微(ひ)光(かり)凄(せ)風(かぜ)に散(ち)り
孤(こ)独(どく)の揺(ゆ)籃(かご)に熟(う)睡(まい)する

寮(寮)友(とも)が睫(まつげ)に恵(けい)迪(てき)の
伝(つた)統(へ)の法(ほ)燈(とう)さゆ(ら)ぎて

栄(さか)光(え)に帆(ほ)立(た)つ吾(わ)寮(寮)い(ま)

五

生(いの)命(ち)の旅(た)びじげんしゆく
路(じ)旅(た)路(じ)厳(げん)肅(しゆく)の

啓(き)示(し)に喘(あへ)ぐ友(とも)垣(がき)と

若(わか)き恩(めぐ)恵(み)の聖(ひ)火(ひ)に狂(くる)ひ

淋(さび)しき魂(たま)を睦(むつ)ぶとき

挽(ばん)歌(か)消(き)え行(ゆ)き洋(よう)々(よう)の

自(じ)由(ゆう)の渚(なみ)濤(なみ)声(こゑ)とよむ

時潮の波の (昭和二十一年寮歌)

序

厳きびしかる道みちに仕つかへて
限かぎりある玉緒たまのを惜おぼしむ

げにさあれ深ふかき因縁えにしの
魂たまゆる生命いのちの饗宴うたげ
汲くまざらめや残のこの月つきに
旅たびの朝あさ早くは明あけぬ

一
時潮じてうの波なみの寄よする間まを
久遠くをんの岸きしに佇たず
不壊ふゑの真珠またまを漁いりする
嗚呼あみつとせ 光采くわうさいよ
緑みどりの星ほしを夢ゆめむ時とき
疎梢こずゑを払はふ天籟てんさいは
秘誦ひしやうの啓示きし語るなり

二

孤窓こさうに流ながる星屑ほしごに
無辺むへんの調律訪しらべへば

測はかりも知らに底ぞこつひゆ
言ことの葉洩はもれて伏いし祈いのる
奇あやしく貴たかき生命いのちをば
友情なつきを讀たふ歌声うたごゑの
溶とけ行ゆく方に馳かつするかな

三
朽葉くちはゆらぎて湧わき出いづる
楡にれの林はやしの真清水ましみづに
己おのれを責せめて泣なく友ともの
孤杖こぢやうを運はぶ逍遙せうぎやうや
遠とほき誓ちかひの日ひを偲しのび
虚むなしき春はるに嘯うたげば
淡あわれし影かげの寂寥さびしよ

四

宿命さだめの道みちを行ゆく身みにも
友ともを誇ほこらん花筵はなむしろ
銀燭ぎんしよく頬涙ほほなみだを照てらす宵よひ

沈黙しじまに語かたる歡喜よろこびよ
心こころを交かし思おもひ酌しやくみ
回まじりふるふ共鳴ともなりは
胸むねの小琴をこを掻かき鳴ならす

五
北斗ほくと頭上づじやうに影かげ冴さえて
神祕かたの息いきに吹ふかれつ
肩組かたみ歌うたふ旅たびの子こを
染そむる伝統でんとうの篝火かがりびよ
暮くるるに早はやき青春せいしゆんの日ひの
追懷おほひを込こむる此この盃つぎを
汲くまん今宵こよひの記念祭きねんさい

結

近ちかきかな楡を陵かを去さる日ひは
還かへり来こぬ足跡あとか愛かなしみて
ひたぶると打笑うちあむ時ときぞ
求もとめつつ得うべからざりし
秀邃うらしき真理まことの道みちは
はろかなり我等われらが前途ゆく途て
進すすまざらめや

渋谷富業君 作歌
寺井幸夫君 作曲

暁の渚離りて

(昭和二十二年寮歌)

篠原昭壽君 作歌
竹内五男君 作曲

一
暁あかつきの渚なみざき離りて

ふるきもの光ひかりなききもの
底そこひなき海うみに抛なれば
いささけき水輪みなわが呼よばふ
想おもひ出での古ふるりし仕草しくさに
告つぐるなりいたき別わかれを

三

さあれ吾わが幸さちは希望のぞみは
ふたたび会あふ事ことなしと
燃もゆる火ひの炎ほ立ちに消きえぬ
あるはただ宿命さだめのみなる
さだめ故旅ゆゑたびを行ゆくなり
いたましきいのちと云いはめ

二

永遠とことはに絶たゆることなく
ひたひたと寄よする波間なみまに
万象くさくさのよみがへりしを
はぐくみしなさけ忘れず
真実しんじつの旗幟きしを取り持もち
いゆくものひたあゆむもの

四

小船をぶねもて浜伝はまつたひ行き
火かの神かみの荒すさぶる山やまを
怖おそれみてかへりみすれば
たちまちに幻惑まどほしは裂さけ
くれなるの血潮ちしほ流ながれて
天地あめつちは夕焼ゆうやけにけり

五

涯はてし知らぬ海うみさまよひて
い着いつきしは辛夷ごふし咲さく丘をか
友垣ともがきとあつく結むすびて
いたましき宿命さだめとかむと
ひたざまに立たちあへぐ夜半やは
静しづかなり星ほしは降ふりつつ

六

溢あふれ出でる涙留なみだどとめて
丘高をかたがく秀ひいづる草くさの
友ともよ見みよ紅あけに映はゆるを
歡喜たのこびに充あてるそよぎを
春はる秋あきは移うつりて行ゆけど
睦むつびつつ耐たへてを行ゆかな

浅緑燃ゆる

(昭和二十二年第四十回記念祭歌)

山家貫之君 作歌

堀井洵君 作曲

一

浅緑燃ゆる北の曠里
荒ぶ嵐を身に受けて
神秘の扉開け放ち
雄叫び高く濁世に
叱咤の剣を振るふかな

二

沈黙の楡林のほの暗く
友と高望を語りてし
三年の夢は淡くとも
羽搏かなかな大鳳は
アンドエスの嶺越えゆかん

三

ソロモンの栄華すでになし
血涙もて築きし幾春秋
花を褥に仮睡めば
春駝蕩の微風か
私語く永遠の理想かな

四

北斗の啓示なほ清く
今宵四寮に輝けば
猛き遊児の熱血は
ナイルの河のなほ浩く
乱れし世をば呑みほさん

五

青史は薫る七十星霜の
崇高き歴史を承継ぎて
明日創造の首途に
今日四十回の記念祭
浩歌はんかな吾が友よ

饗宴の杯に

(昭和二十三年寮歌)

中坪清八君 作歌
堀井洵君 作曲

一

饗宴の杯に淡れゆく
手稲の峰に今しばし
追憶止めて涙する
逝く水はやき三春秋の
絵巻はやがて尽きざらん
優しき薫香遺しつ

二

真理の道の彷徨に
遊子は尋めぬ人性を
真紅に輝く森蔭に
梢火廻りて歌へども
琥珀の酒を酌みしかど
羸しものは何ならん

三

原始林の濃緑のまどろみに
高夢は結びぬ先人の
遺訓の蔭に泪あり
孤雁一たび大地に啼きて
驚き醒むる邯鄲の
草野に夕陽は既に没つ

四

秋の哀愁は旅の子に
ひとしほ沁みる夜半の月
悲恋の苦悩胸に秘め
北斗の光影に嘯けば
若き情熱の高鳴りて
凋落の世に響くなり

五

狂ふ吹雪に我が思索
託して進む三百の
児等の生命はみはるかす
北溟の曠野にこだまして
東の空は暁紅に染み
高き理想の旭日は出でぬ

六

楡の鐘声に逝く青春の
神秘を解かん花莖
朝はろけき旅を行く
郭公鳥よ永遠に
黒百合咲ける石狩の
汝が故郷を憶えよや

春静寂なる

(昭和二十三年逍遙歌)

中島通雄君 作歌
佐々木淳君 作曲

一

春静寂なる石狩の
曠野に漂泊ひて人を哭き
秋蕭々の寮窓に倚り
夕雲遠く友を呼ぶ
北斗の啓光さしそえど
哀れ悲しき旅ならむ

二

北溟ゆく雁は名のみにして
暮る秋風に啼く虫か
楡梢に喘ぐ郭公か
はた又魂の語らひか
現の波濤は荒くとも
知るや無象の天の外

三

十勝の峰に断雲怒り
白銀吼ゆる朝風も
奇しき調の琴と聴き
燃ゆる理想に悶えつつ
ただひたぶるに辿りゆく
長き生命の斗争に

四

自然の芸術変らねど
何処に被所を尋めゆかむ
ああ孤独の寂寥を
味はひ知れる人ならで
誰に語らん入相の
鐘鳴りひびく楡陵の上

五

花咲き散りて春秋の
遷りてここに三星霜
逝にし遊宴の宵の夢
たぎる情熱を篝火に
残恨の杯を汲み交はし
高唱はなんかな自治の歌

六

今逍遙の原野に萌ゆる
森の翠の色深く
行手遙げき豊平の
清流に泛ぶ綺花の影
哀れ愛しき絢夢なれど
我が生命こそ真なれ

彷徨へる心のままに

(昭和二十四年寮歌)

池田基君 作歌
伊藤嘉弘君 作曲

序

彷徨へる心のままに
見返りの陵を登れば
野は遙か去にし日の面影
簫々の闇にとけゆく
斯くあるは人の宿命か
天地に星の飛ぶなり

冬

雪の舞ふ砂丘薄れて
光輝なき旧りし仕種は
忘却の寄する汐音に
消え去りぬ名残の水際
叫ぶには余りに深く
涙には余りに虚し

春

清冽の玉散る知性
燃え狂ふ情熱の焰
若き身の裏に留めて
相剋の旅を逝くなり
苦悩しみに頬を濡らせば
春雨も楡影つたふ

夏

初夏の野に陽炎たてば
痛ましき魂の疵の
陽に癒えて幸福は希望は
微風に咲き出づる華
育くみし白珠の水
浜茄の赤き血潮よ

秋

秋深き磯に佇み
汐飛沫浴びし彼の時
月影に宿命解かんと
友垣の誓ひし言葉
斯く故に千草ふみしき
寥々の孤杖を運ぶ

結

三春秋の絢夢原始林影に
散り果てて悲哀を秘めつ
陵を去る遊子の瞳
又燃えぬ愛情と決意に
暁の新たな旅出
永遠に時は流れぬ

悠遠き日にあこがれて

(昭和二十五年寮歌)

高倉和昭君 作歌
金井俱光君 作曲

一

悠遠き日にあこがれて吾は来たりぬ

北国の詩の都ぞ

やはらかき緑の芝生

美はしき小川の畔

清明の森蔭深く訪ね来て

新らしき喜びに満つ

二

讚へなむ石狩の曠野に打建てし

雄大なる先人が足跡

四十三回記念祭巡りて

光栄あれ伝統の法燈

星辰清きエルムの学園に甦へりたる

鐘の音は高く鳴るなり

三

あかつきは紫の夢にけむれり

雪解なる陵にのぼりて

恋ひ慕ふ意気と血汐の

花香る青史の光栄よ

二春を魂の故郷に契りては

培はん尊き遺訓

四

仰ぎ見よ秀でたる久遠の山河

悠久の時の移ろひ

森蔭に心情は燃えて

恵むなり真理の秘奥

青春の高遠き理想を抱きては

進まなむ厳しかる道

新らたなり天地

(昭和二十六年寮歌)

長尾久司君 作歌
小林滋宗君 作曲

一

新らたなり天地

光あり北の学舎

二年を心に契る

若き日の生命の郷に

誇らなん自治と自由の

四十星霜の高き伝統よ

おごそかに遺訓をこめて

楡鐘は響かん

二

雄大いなり天地

永劫の時潮の流れよ

悠久の神秘をひめし

うるわしき石狩の野に

うたわなん希望のうたを

魂ゆるする雄叫びの日に

あこがれと正義の旗を

かざし進まん

三

きびしかる天地

野にすさぶ試練の嵐

苦しみを越えて幸あり

たゆみなく求めて得たり

輝ける久遠の真理

よろこびの若き力に

創造き行く恵迪の寮

とわに栄えん

永遠の水のひろごり

(昭和二十七年寮歌)

村上啓司君 作歌

田畑実君 作曲

一
永遠えいえんの水みずの広ひろごり

去いにし全すべての名な残ごりをしるす
陽ひの光ひかり水みの面もにわたらず
厚あつき雲くもの低ひくくたれたり
大おおいなる水みずと強つよき風かぜとの
須しゆ臆ゆなる静しずけさ今いまぞ破やぶれん
無む限げんの過か去この名な残ごりを無なみと
今いまこそ吾われ等ら雄お々おしく立たたん

二
再ふたびす宣せん臂びの叫さけび

血ちをもて驗ありし訓おしえを忘わする
屈くつ辱じよくの条ふ文みは結むすばれ
時ときの声こゑの高たかく頭あらわ
核かく崩ほう壊かいなる強つよき力ちからは
生いのち命あいと愛あいとを毀こぼ捨すてなん
再ふたび過か去この犯あちせじと
今いまこそ吾われ等ら凜りん乎こと起たたん

三
北国きたくにの樹き々の直なおさよ

牧場まきばの草くさの色いろの濃ふか緑かさよ
永ながき冬ふゆ厳きびしき試し練れんに
打うち耐たえたる姿すがた美うわし
潮風しおかぜ荒あるる磯いそにさえ
名なもなき草くさ木きの生せいをば享う受けぬ
自然しぜんの真理しんりの頌歌しょうかを唱うたい
今いまこそ吾われ等ら深ふかく究きめん

手をとりにて美しき国を

(昭和二十八年寮歌)

山本玉樹君 作歌
三河勝彦君 作曲

一

倒れたる友の姿を
忘るまじ我らが胸に
恐ろしき雲空に充ち
けがれたる祖国の山河に
新しき緑の息吹が
若者の槌音に和し
もろ人の幸深めつつ
この町にこだます日まで

二

沸き出でよ新らしき歌
消すまじ自由の歌を
わだつみの声をばひめて
去り果てし若き生命に
たくましき若き鼓動が
美しき歌声に和し
平和なる国を築くと
海こえてこだます日まで

悲歌に血吐きし

(昭和三十年寮歌)

柳田和朗君 作歌
菅原幸雄君 作曲

序

悲歌に血吐きし我らもが
永劫不変を探求めんと
遙々漂泊来たりても
赤き浜茄子摘みとりて
悪魔牛耳り詩吟する
天下不仰の寂寥児

春

未知の世界に立ち薫る
冬の名残りか歡喜か
春爛漫のただなかに
手稲の山の淡雪の
雪解が衣の袖軽ろき
門出が詩歌を讃歌わんや

夏

原始の森に深く入り
朱碧混じる眩さに
神秘無象の影さして
郭公生命の顛律で
若き誇りに酔い痴れて
自由の頌歌歌うなり

秋

朝の白露は詩を吟じ
夕陽紅く舞い乱る
秋風高歌昂然と
踏轟ろかすストームの
孤袖の遊子大望の
希望に宿る北極星

冬

雪崩に雪を血で染めて
若き生命を捨つるとも
あこがれ清浄き樹氷恋い
奥山古き谷間小屋
空想の羽の頂上に
炉火囲み唱う歌

結

年古る樹々は皆朽ちて
生の心が落葉の
記憶の底に沈みいで
悲哀の涙ほどばしる
世の暗闇にひそめども
去る二年を謳歌えんや

花繚乱の

(昭和三十三年寮歌)

前島一淑君作歌・作曲

一

花繚乱の夢に酔い
地の囁きの音に伏せば
草湫々の声すなり

二

夜光流るる芝草や
辛夷の花の香に迷う
遠き憧れ逝にし日よ

三

窓辺に招く幻の
影にあくがれ彷徨えば
森に桂の火は燃えぬ

四

今紅の篝火よ
裸形の友は肩組みて
去り行く青春を惜しむかな

五

静寂甦りぬ春の宵
銀漢の下希望なる
支笏の湖に星は飛ぶ

花咲き散りて

(昭和三十二年第五十回記念祭歌)

佐伯政英君 作歌
小椋進君 作曲

一

花咲き散りて五十年の
実りの秋ぞ幸多く
ここに我等が記念祭
寮友よ歌えよいざやいざ

二

楡の大樹に尋ぬれば
誇らしげにぞ答えたる
吾が先人の青春の理想
寮友よ讃えよいざやいざ

三

歌声原始林にこだまして
爆笑夜空をつんざけば
楡の精さえ踊らなん
寮友よ踊れよいざやいざ

四

我等が誇る自治寮に
五十回めぐる記念祭
さらに栄ゆく此の寮を
寮友よ讃えよいざやいざ

吾れ憧れし

(昭和三十三年寮歌)

佐伯政英君 作歌
佐藤一正君 作曲

一
吾れ^わ憧れ^{あこが}し美^びの国^{くに}の

春^{はる}は名^なのみの春^{はる}なれど

雪^{ゆき}解^げの水^{みづ}に甦^{よみがえ}る

野^の面^{づら}に充^みち満^みつ生^{いのち}命^ちあり

二

遠^{とほ}くふるさと離^{はな}れ来^こし

寮^{しやう}友^{ゆう}と睦^{むつみ}の杯^{つぎ}酌^{しやく}めば

今^{きょう}日も手^て稲^{いね}山^{やま}に夕^{ゆう}映^はえて

鐘^{しょう}声^{せい}はろかに快^{こころ}よし

三

楡^{にれ}の木^こ蔭^{かげ}に憩^{いこ}せば

紫^し紺^{こん}の峰^{みね}をこえゆきて

父^{ちち}母^{はは}いかに君^{きみ}いかに

つぎるを知らぬ吾^わが懐^{おも}い

四

ただ茫^{ぼう}漠^{ばく}の大^{だい}平^{へい}野^や

静^{しじま}寂^{じやく}の夜^{よる}は更^ふけゆきて

囲^{かこ}む焚^{たき}火^びも暗^{やみ}に消^きえ

夜^よ空^{ぞら}彩^{いろど}る北^{ほく}斗^と星^{せい}

清き生命の

(昭和三十四年寮歌)

吉野生壮君 作歌
中川清吾君 作曲

一
清き生命の初潮に

大なる志を打ち樹てむ

学び舎の緑消えんとすれど

求めて止まぬ探求の

心は常々変わる事なく

二

毅き生命の奔流に

燃ゆる生命を貫かむ

時代の波は荒れ狂うとも

永遠に変らぬ誠実の

青春の血は絶ゆる事なく

三

直き生命のただ中に

熱き念をそそがなむ

頭上に黒き雲漂えど

燃えて尽きせぬ創造の

生命の光消ゆる事なく

茫洋の海

(昭和三十五年寮歌)

三浦清一郎君 作歌
前野紀一君 作曲

一

茫洋ぼうようの海うみに憧あこがれ

峻険しゅんけんの峰みねを慕したいて

北国きたくにの大地ちちに旅行たびけば

溢あふれ満みつ夢ゆめ若わかさ

果はてしなく広ひろごれる地平線ちへいせん

二

曇くもりなき心こころ求もとめ

厳きびしかる努つとめの道みちに

真まなる美びを探たざらんと

人ひとの世よの旅たびにして

結むすばれし二年ふたとせの宿やどなれや

三

移うつり行く時ときにはあれど

涙なみだして誓ちかいし言葉ことば

尊とうとしや若わかき日ひの夢ゆめ

春秋しゅんじゅうの十年ととせの後に

思おもい出で声こえもなく偲しのばんや

甦えれ白き辛夷よ

(昭和三十六年寮歌)

小川徳人君 作歌
脇地炯君 作曲

一

甦えれ白き辛夷よ

吐息なす憂悶の日も

寂莫のまどろみも去り

オホーツクの水やわらぎて

流水の群軋める国に

彷徨のい着きしを知る

朽葉ぬき頭もたげし若き息吹は

わが若き日の昏迷を掻く

二

濃霧を呑み大気は青む

輝ける太陽に酔い痴れて

高澄の日高の峰を

わだつみの青をば追わん

ああ慵げき虚を破りて

筋骨は火照に燃えぬ

エゾマツの深き樹林を渡る雄叫び

わが若き日の胸に響かん

三

眼路渺茫の野末遙けき

石礫の曠野に励む

先達の真情を凝らし

地の熟睡静かに温む

真紅をはきて入日たゆたい

颯々とポプラは鳴れる

友どちの組たる肩は若く息づく

わがあすの日の耕土を期して

四

白皚々と六華は咲けど

うす月は雲をどよませ

逆巻の吹雪は狂う

邂逅に結ぶ灯火

濃き鈍色ににじみそめつも

手をとりて声を落さじ

明晰な眼を持ちて凝視る道に

わが霹靂の痕を印さん

壁歌は語る

(昭和三十七年寮歌)

執行洋視君 作歌
助川秀三郎君 作曲

一
壁歌は語る幾星霜

あつまさんわこうど
集り散ず若人が

夜々に語つたる苦悩の記

日々語つたる歓喜の記

ああその意気は永遠に栄えん

二

壁歌は続く百年に

美辞をば嫌いし若人が

好機に変えたる時流の言

好機に乗りし時流の波

ああその思出いつか崩れん

三

壁歌は残る千代に

日夜ひもとき探索に

我が捨てたる邪道よ

我が容れたる真理よ

ああその純情後に偲ばん

凋落正に秋深し

(昭和三十八年寮歌)

諏訪正明君 作歌
宮田睦彦君 作曲

一

楡にれが木この葉はの秋風あきかぜに
吹ふかれて落おつる芝草しばくさに
佇たたずむ男子おのこの胸むねの中うち
散ちりしく落葉おちほの数知かずれず
凋落正ちようらくまさに秋深あきふかし

二

灰青白ほのあおしろき月影つきかげの
銀杏いちようなみ並木なみの夜歩よあるきは
小ちいさき鳥とりの乱れ飛とび
路面ろめん覆おえる金色こんじきに
憂愁正ゆうしゆうまさに秋深あきふかし

三

寮りょうが窓越まどこし蔦つたの葉はも
黄色きいろく紅あかく色いろづきて
梢こすえを揺ゆする秋風あきかぜに
鳴なるは心こころのため息いきか
寂寥正せきりようまさに秋深あきふかし

四

ゆえだもあらぬこの悩みなや
心こころの底そこに滲しみ入りいて
ぬぐいも切きれずただ涙なみだ
流れ落ながちては地ちに吸すわれ
懊惱正おうのうまさに秋深あきふかし

偉大なる北溟の自然

(昭和三十九年寮歌)

司馬威彦君 作歌・作曲

序

偉大なる北溟の自然は
我が眼前に限りなく広がりて
野に満てる清冽の気は
雄々しくも気高き情懷もて
嶮路遙かに辿り来し
遊子が胸を今や満しぬ

一

颯々の北風は荒び
白銀の華大地覆えど
そはほろかなる古より
汚れなき美の世界なれば
若人はひたぶるの
愁いを秘めて
異邦ゆ憶懷れ集いぬ

二

いよ増す静寂のなかに
永劫の影宿す原始の深森よ
先哲の行路を慕いて
思索胸に榆陵を歩めば
仰ぎみるエルムの梢に
萌え出ん若き情熱は

三

かりそめの宿にはあれど
忘れ得じ若き日の遍歴
彷徨えば夕陽の榆陵に
宵闇はかそけくも訪れ
睜みてし真心と友情に
篝火は赤く燃えたり

四

輝ける北国のたくみよ
されど優りて美しき自治の伝統よ
斗い苦悩み寮友と語れば
などで疾く過ぎ行く二年の春
願わなん永久の栄えを
恵迪の寮故郷の上に

結

されど視よ我等が周囲を
邪悪なる権力は四方に荒び
我等が愛し誇らん自治の砦に
暴逆の誠は課されんとす
されば我が寮友よ腕むすびて
今ぞ正義の旗を高くかかげん

新しき陽は

(昭和四十年寮歌)

金子公良君 作歌
西雪弘光君 作曲

一

あたらし
新しき陽は今昇り

そら
空のはて黎明を告ぐ

くろくもにし
黒き雲西に流れん

あらし
吹きすさぶ嵐をつきて

へいわ
平和をと声は轟く

二

たく
逞ましき友の怒りに

お
雄々しくも我等誓いし

よとわ
幸の世永遠に築かん

ひろくわ
広き地に蹴ふりかざし

みぢりもみずなが
緑萌え水流るまで

三

かが
輝やける祖国の山河に

われら
こだまする我等が雄叫び

ひと
一すじの光求めて

うでく
ひたすらにただひたすらに

あゆ
腕組みて歩み進まん

四

しんじつ
真実の鐘鳴り響き

もりかげ
森影にどよめきのわく

はたかせ
自治の旗風にゆらめき

な
名を留む伝え守りて

けい
恵迪は今よみがえる

いつの日か生命結ばん (昭和四十一年寮歌)

須藤洋一君 作歌
吉川正文君 作曲

序

重畳たる手稲、藻岩の山脈を吾が宿舎の青垣となし
鬱乎たる原始の叢林を吾が逍遙の小径となす。

吾が寮友よ草原に出でよ、暗き孤城より出でんかな。

深遠き蒼穹あまりに青く、輝く雪原あまりに白し。

さればよしその身は平々凡々ならんとも、吾等が野望尽くるを知らず。
静寂を破る蛮声に、吹雪鎮むる高吟に、青春の意気託しなん

一

いつの日か生命結ばん
碧空高き楡よポプラよ
黄金なす銀杏並木よ
枯れ枯れと曠野に朔風吹けば
荒涼の憂愁よぎりぬ

二

島松の雪の路上に
手を振りし速き日の夢
去り行きぬ偉大なる巨影
君聞くや馬上の声を
広ごれる石狩の原野に

三

鶏はまだ長鳴かずして
貪れる熟睡をあとに
仄暗き叢林に佇立てば
今いずこ青き野望は
消え行くや先人の遺声

四

蝦夷人よ今こそ瞑想え
星辰しるき彼の冬空に
天翔ける天馬の行方
吹雪き荒ぶ北風をつぶてを
若駒の鞭とはなさん

五

瞞み来て親友は高唱えど
舌苦き地酒に酔い痴れ
ストームに身は狂乱うとも
忘れ得じ果てなき旅路
この惆悵誰に語らん

六

暖かき光求めて
彷徨えり冷たき野末
北国に春来りなば
若き日の稚き愁思は
雪の如融けて流れん

寒氣身を刺す

(昭和四十二年寮歌)

岡田雄三君 作歌
森田弘彦君 作曲

一

寒氣身を刺す北国の
永遠に名を覇す恵迪寮
四百野人の集いしに
我等が理想何時の日か
成さざらむとぞ意気高し

二

窈窕多し札幌に
弊衣破帽の身なれども
一度歌わば蜚声の
遠く手稲に木霊して
嗚呼誰か知る吾が野心

三

燃ゆる紅原始林
尽きぬ想いを酒杯に
酔えば肩取り乱舞する
吾等が行先に光明あり
樂しからずや此の饗宴

四

蒼空の下佇みて
木の葉身に降る秋の日に
仮いこの身は一介の
卑しきものと知るとても
吾が野望は永遠に

芳香漂う

(昭和四十二年第六十回記念祭歌)

稲田雅久君 作歌
名田正信君 作曲

一

芳香漂うやわらかの

残んの春の夕間暮

朧にかかる夕月に

浮かぶ辛夷の花吹雪

ああ鳴り止みて聞えこぬ

色壮麗の鐘の音は

六十路の夏に鳴らざるや

いま黄昏の自治の庭

二

細き羽音も秘そやか

蜉蝣闇をかすめゆき

奔る流れの音もなく

まつよい草の星あかり

ああ死に絶えて泳ぎこぬ

銀鱗おどる紅鮭は

六十路の秋に溯らずや

いま宵闇の自治の川

三

風に棚引く軽やかな

雲蒼空の朝ぼらけ

よぎる秋津の影紅く

残んの月は薄れゆく

ああ舞い去りて渡りこぬ

長の旅寝の雁は

六十路の冬に還らずや

いま有明の自治の原

四

軒に麗なる銀の

垂氷に映る灯に

星影凍みる松が枝を

散るひとひらの雪の花

ああ枯れ果てて萌しこぬ

野も狭に埋もる花の実は

六十路の春に咲かざるや

いま夜も更けぬ自治の舎

五

露に滴りぬ生々々

榆林にねむる夢醒めて

牧場におどる朝もやの

さなかに歌う夜明の鳥

見よ紅の山の端に

湧き立つ空の群雲を

つらぬきわたる光かな

いま六十歳の夜は明けぬ

六

寮友の顔に篝火の

炎もわらう記念祭

歌をうたわば玉響の

憂さも舞い飛ぶ火の粉なり

いざ高らかに祭歌

はやる太鼓の轟きは

夜空を深く駆け抜けて

北斗に和する生命なり

樹梢霧海に

(昭和四十三年寮歌)

新橋登君 作歌
佐藤菊男君 作曲

一

樹梢霧海に消え入りて
北溟牙城の夏の宵
難攻不落を誇りしも
時凋衰の風強し

二

伝統の石に佇みて
古昔の意気に涙する
秋の今宵の宴にも
貧交行の風寒し

転句

榆陵の二春に宿せる白露の
生命短命にして吉しとする
さにあらば吾等が友よ

久遠なる星に
崇巖に大志を告げるべく
今高らかに誓いけん

三

白雪深き北国に
迪をたずねる旅人よ
朔風如何に荒吹とも
真理の郷は遠からじ

四

いざ寮友ようたわなん
あすの生命を闘うと
万花乱るる春の日に
高遠き大望を目指さんや

孤独に満てる

(昭和四十四年寮歌)

山崎芳行君 作歌
服部泰明君 作曲

一
孤独に満てる我が青春に
何時しか遅春も訪ずれぬ
まだ萌えやらぬ芝生の上に
一片舞い散る桜花
朝露に濡れ新な寮友と
盃かわす楽しさよ
嗚呼我一人にあらずして
我が青春は寮友とあり

二
孤独に満てる旅人一人
理想を求めて蝦夷へ来ぬ
その彼の人の心知れりや
原始の森に鳴く郭公
寮友と別れて一月経ちぬ
今日懐しき便りあり
嗚呼我一人にあらずして
我が青春は寮友とあり

三
孤独に満てる我が自治寮に
早くも秋の気配あり
夕日に映ゆるポプラの並木
憂愁風に枯れ葉飛ぶ
再び会いぬ寮友と連れ立ち
真理の国を彷徨いぬ
嗚呼我一人にあらずして
我が青春は寮友とあり

四
孤独に満てる我が同胞に
厳冬正に伸し掛り
深雪に埋むる原始の森へ
月光冴かに突差しぬ
冷酒を飲み野心語れば
いとど深まる友情かな
嗚呼我一人にあらずして
我が青春は寮友とあり

秋逍遙

(昭和四十五年寮歌)

熊野芳明君 作歌
吉田守男君 作曲

未明

秋あきに秋あき添そう時とき雨あめ月つき

曙あけぼの星ほし瞬はなはたく恋こひ々々と

されど近ちかづく蕭しょう晨しんに

幽お愁もいはつつののるるせせつつななくくも

落らく涙るいししばばしし悄しょう然ぜんと

払曉

蕭あさ晨さは来きにけり石いし狩かり野の

野の菊きくに滴したたる血ちの霰しずく

木この葉はさやぎぬ涼すず風かぜに

野のを流なが離らえば深ふかき哀うれ愁い

情なさけの露つゆを探もと求もとむむなり

昼

遙はるかに煙けむる大だい平へい原げん

蕭しょう然ぜん秋あきの小こ糠ぬか雨あめ

原も生り林の錦にしきも色いろ寂さびし

黒あ俊お馬おの長こえ嘶えに沈ゆめ思め破やぶれ

秋あきの情こころ趣ちゆうをし知はるち二十

落日

時し雨ぐれもやみてあかねさす

赤むら紫さき雲くもの黄た昏そがれに

夕せき陽よう返かえし珠たま玉の如ごと

蜻あき蛉つが翅は翎わに我わが久おも懐い

真ま情こころの友ともへと託たくすすかな

初更

釣つる瓶べい落おしの秋あきの日ひの

紫し紺こんの闇やみに淡あわく浮うく

利と鎌がまの秋つ月つきはあな悲かなし

きらめく長ほし庚しにたなだみ涙だ

己おのが運さだ命めか斯かくあるが

深更

夢ゆめ幻まぼろしか人ひとの世よは

秋あきの百も子も夜よに我われ悄しょう然ぜん

地ち平へいの彼かな方たへ冴ほ星し空そらを

過よりて落おつる流ながれ星ほし

たなだだただ涙なみだは何なに故ゆえか

朔北に

(昭和四十六年寮歌)

伊藤正朗君 作歌・作曲

一

朔北さくほくに手稻ていね風かぜの咆哮こえ絶たえて
静寂しじまに痛いたし遠汽笛とおいでき
凍こてつく雪原はらに寒月かんげつの
蒼あおき光ひかりの射さしそえば
聳ボ天樹ブラの影かげは猛たけくして
虚空そら指さす彼方かなた宿やどり舎やの
灯ひは今宵こよひまた旅人たびとの
継つぎ培つちかいし迪みちを諭さとせり

二

朝烧あさやけて南みなみに風かぜの起たつ聞きかば
北きたの都みやこに春近はるぢかく
雪融ゆきとけ水みずの溢あふれては
豊水ほうすいの岸塵きしりたか高たかし
黄きばむ空そらゆく鳥とりもなく
土つちの香かぞする野幌路のほろじを
孤ひとりそぞろに迪たどる日ひは
異郷いきょうの旅たびを思おもい侘わぶかな

三

はろばろと続つづく沃野よくやの玉葱ねぎ島ばたけ
金きんに輝かがやく北指きたさして
延のびる鉄路てつろの傍かたわらに
かの石狩いしかりの文学碑ぶんがく碑
濁にごれる川かわに臨のぞみては
沈しずむ夏陽なつひに涙なみだする
回顧かいこ百年ひゃくねん忘れわすれずや
この地拓ちひらきし先人せんじんの夢ゆめ

榆陵に月は

(昭和四十七年寮歌)

加藤秀弘君 作歌
矢野哲憲君 作曲

一

榆陵に月は懸れども
星霜深き原始林暗し
藜萋ゆらぐ風有れど
思い分かつたん術も無し

二

天空破る落雷はあれど
そびゆる聳天樹は堂々と
慟哭の声上げらんと
意気揺籃の時は今

三

銀晶ふるう雪原なれども
変らぬ沈黙奇しきかな
黄鶴消えて姿無し
蘇える春まだ遠く

四

鐘の音遠く聞えども
雑踏のやさめぎの
辛夷花咲く黎明よ
石狩の野今何処

五

無尽の星を仰げども
天に無双の北斗星
白亜の城に覚醒し
永遠の生命を誦わなん

六

未明に懸る白き月
夢見し思う北溟の海
憧れ来しは北溟の峰
呼々我前途の行く果は

冬の大地に

(昭和四十八年寮歌)

伊藤潤平君 作歌
矢野哲憲君 作曲

一

冬の大地に夢は醒め
旭日に浮ぶ白亜城
原始の森は樹氷咲き
西方空を眺むれば
新雪淡き手稲山

二

ポプラ並木の葉も落ちて
秋の香深き夕間暮れ
白日西に沈み行き
素月東の森に出ず
乾坤環り復た周る

三

浜茄子の砂丘たたずみて
はるかに眺むオホーツク
知床の嶺雪かぶり
沈む入日に白鳥の
飛影ぞ哀しく消え去りぬ

四

旅のロマンに誘われて
支笏の岸にさまよえば
静寂の嶺は荘厳に
仰ぐ星座は闇に浮き
静に光る北極星

五

荒ぶ吹雪を旅の魂
一年涙胸に秘め
我が夢かけるオリオンに
我が春永久に朽ちざらん
蝦夷が大地ぞ忘るまじ

北の都は

(昭和四十九年寮歌)

大森秀治君 作歌・作曲

一

北の都は開発かれて
喪失われゆく大自然
寮の姿も変われども
恵迪の名は永遠に

二

残雪溶けて東風吹かば
大地は黒々と輝けど
川流絶えて水は涸れ
湿原に咲く花影なし

三

緑葉さわぐ楡の森
昔日の影すでになく
短き盛夏の夕陽を浴びて
ただ寥々と佇立まう

四

虚空逍遙う月の影
蒼白く映ゆ原始森の木々
秋風にうたれて舞う落葉
早雪までのこの眺望

五

白雪烈風に舞い上がり
疎々たる杜を吹き抜けぬ
樹影に黒き鴉鳥
寂莫として声もなし

六

警醒の鐘鳴らせども
迷夢の夜は未だ明けず
行方も知れぬ朔風に
心の痛みつのるかな

七

北に旅してこの宿に
仮寝の夢を食はりて
過ぎし歲月早二年
懐かしさ満つこの団居

憧憬の故郷

(昭和五十年竊歌)

佐藤守君 作歌
関川哲夫君 作曲

一

「汝が故郷は何処にありや」
熱き血潮に身は溢れども
希望を胸に行方も知れず
朔風に身を寄せ漂泊い出でん

二

聳ゆるポプラは何をか象徴し
遙かな大地は何語るらん
渺茫の地に理想を秘めて
真摯の道を歩みゆかん

三

逍遙の詩静寂に透り
曠野を一人ゆく吾侪めば
日輪幽寂に手稲の端にて
朱に染まらん哉原始の森は

四

嗚呼寮友よ夕の瞑想
己身に嘆けども憂愁はやまず
白銀の季節寮舎に在りて
熱き心を語り明かせよ

五

光幽けき憧憬の故郷
霞静かに流れ渡りて
新緑にみる自然の黙示
北溟の大地は我が故郷か

いつの日にか

(昭和五十一年寮歌)

小嶋茂君 作歌
真鍋利徳君 作曲

一

夜は巡り
限りなき光の束は
樹林をつらぬきぬ
朝の静寂の中一人にて
無為の思いもち嘆き憂える
もう情熱もなく涙ながる

二

何を求め
ほの暗き大気の下に
真摯な魂は
一つの心を持ちさまよひぬ
もはや言葉なく凍てつきて立つ
ポプラを見つめ祈りささぐ

三

大きな精神
物思うわれに
いまだあれどかすかなり
不毛の日々はかわき過ぎ去りぬ
なれどいつの日か結びつけなん
我等が命大きな魂へ

四

女性の清き美しさ
真摯な理性の輝きにさそわれて
ほのかな恋の想い胸に
なれど結びえず
あまりに深き心のあがき
この暗さに

五

深き森のささやき
清冷な川の流れに聞きいりて
清らかな中我息しなん
物を思わなん
静けさの中とけこみいりて
いつの日にか

新たな燈火

(昭和五十二年寮歌)

石川徹君 作歌
元辻毅君 作曲

一

北国の荒ぶ吹雪に
榆の木の高く聳える
原始林の中果てる事なく
雄々しくて人の臉に
何時迄も鮮やかに刻む
其の姿を恵迪寮は

二

憂愁と理想を胸に
爽やかに寮友は去り行く
夜を徹し未来の事を
御互に語った部屋に
思出の言葉を残し
懐かしい恵迪寮を

三

年月に傾く姿
痛ましく懐いの残る
部屋の壁崩れ落ちて
昔から点る燈火
今ほもう細くなり行く
我々の恵迪寮の

四

先人の残した燈火
心有る寮友よ絶やさず
思い見て 新たな燈火
今こそ探し求めて
点そう絶やす事なく
何時迄も恵迪寮に

恵迪節

(昭和五十三年寮歌)

甲斐陽輔君 作歌・作曲

一

エイホッホッホッ

エイホッホ エイホッホ

けむりを噴き出す

有珠の山 有珠の山

地をやぶる土の力こぶ

エイホッホ エイホッホ

大地の主の大あばれ 大あばれ

命がおしけりや

地べたにひれ伏せ おろかもの

二

エイホッホ エイホッホ

塩を噴き出す

大くじら 大くじら

太平洋にはねる神の魚

エイホッホ エイホッホ

海の主の大あばれ 大あばれ

俺がこわけりや

海にぬかづけ おろかもの

三

エイホッホ エイホッホ

大地に根をはる恵迪寮 恵迪寮

深雪をとかす友の血潮

エイホッホ エイホッホ

二百五十の青春のくるい咲き

若さがつらけりや

銀河にさけべ おろかもの

エイホッホ エイホッホ

草は萌え出で

(昭和五十三年第七十回記念祭歌)

朝倉仁樹君 作歌
田坂幸平君 作曲

一

草は萌え出で郭公は鳴き
憧れ睦ぶ宿舎に
疾風怒涛の渦の中
明り求めて放浪いぬ
巷の塵をふり払い
悠々迪を歩まん

二

蛮声放歌乱舞する
姿雄々しき吾なれど
原始林の可憐な白花に
心ふるわす春もあり
清き乙女子去りて行く
恋に涙す秋もあり

三

気高き野心の男の児等が
士幌に山小屋をうち建てぬ
十勝の山と平原に抱かれ
果てなく魂翔けるなり
厳しき北の大地より
新たな夢に飛びたたん

四

読み飲み語り夜は明け
熱き情に年は経り
ああ青春の祭日も
はや七十を数うなり
寮生よ再び楡影に
三十年後に集わなん

うす紅の

(昭和五十四年寮歌)

鶴原文孝君 作歌
高田和重君 作曲

一

うす紅くれないの秋あきゆうぐれに
滅ほろびの風かぜは吹ふき荒すざぶ
斜しや陽ようかげ射さす日ひに移うつろいて
傾かたむく姿すがた痛いたましく
我が胸むねに満みつ過いにし日ひの映はえ
懐おもいは恵けい迪てきと共に

二

うす紫むらさきの冬ふゆあけどきに
透すみわたる風かぜ底そこ凍おる
もの音おと絶たえて冷つめたく寒さむく
暗くらくも映はめる空むなしさに
倒たおれゆくもの今いまこの時ときに
想おもいは恵けい迪てきと共に

三

うす靄もやけぶる春はるあけぼのに
昔せきじつ日の影かげたゆたい惑まどう
されど緑みどりはまだ若わかくして
咲さき初そむ花はなの望のぞみもて
新あたらしき日ひのかけろい浮うかぶ
憧あこがれ恵けい迪てきと共に

四

うす花はないろの夏なつよい闇やみに
たまゆら風かぜはさわやけし
我が宴うたげにも星ほし降ふる幸さちと
歌うたう寮と友ともらの嬉うれしさに
憩いえる帆ほにも希おもいありたし
夢ゆめこそ恵けい迪てきと共に

五

うつろう四季ときに感おも慨いをこめて
朽くちゆくものを見みつめつつ
いまだ乾かわかぬ血けつ涙なみをもて
ただひたすらに祈いのり捧ささぐ
唯ただ一しん真じつ実みの迪のこを残のこさむ
想おもいは恵けい迪てきを永と遠とに
希おもいは恵けい迪てきよ永と遠とに

楡は枯れず

(昭和五十五年寮歌)

新井桂二君 作歌
奥田和人君 作曲

北きたに生うまれし者ものたちよ

北きたに出で会あいし者ものたちよ

北きたに奢おごれる者ものたちよ

北きたに歌うたえる者ものたちよ

永と遠とに祈いのりし朝あさは未いまだかなわす

百もも年とせに織おりたる衣きぬは当まさに引ひき裂さかれんとす

嗚あ呼あ願ねわくは二ふた度たび糸いとを紡つむぎて

限かぎりなく澄すみわたる穹きゅう北ほくの空そらに舞うたわん

一

朝あさ靄もやけむる今いまひとときの

熟うまい寝ぬめの夢ゆめの幸しあせよ

覚さめて現うつに見み渡わたせば

美うつくしは崩くずれゆく北ほく都となり

天てん空くう常に雲くも抱いだけども

楡エルムは萌もえて大ち地ちをまねく

二

清せい冽れつの野のに道みちを耕たがやし

荒あ野のに明あ日すを信しんじつつ

彷徨さまよい行ゆける寂さびしさに

陽かたは傾たふきて我われを見みる

虚うついゆける時ときにこそ

楡エルムは映はえて風かぜを斬きる

三

北きたの自し然ぜんは蝕むしばまれゆき

青あお葉はの降ふるや青はる春はるの寮にわ庭わ

忘わするるなかれ大たい願がんを

胸むねに秘ひめし涙なみだ痕こんを

時ときは人ひとはと変かわれども

楡エルムは枯かれず空そらをさす

汝と我の

(昭和五十六年寮歌)

山根誠君 作歌
長谷部健君 作曲

一

よすがなき姿すがたも見せぬ郭公かつこうを
捜せしは誰ぞ汝なんじと我の瞳ひとみなり
草くさいきれ燃えたつ野のにて戯れぬ
獣けものらは誰ぞ汝なんじと我の姿すがたなり
原始林もと古屋ふるやを覆おおいたる
邪よこしまなものめぐる世よに
正義まことの想おもい何処いずこにか
汝なんじと我の胸むねにあり

二

轟とどろける荒磯あらしの波なみのただ中なかを
漕こぎゆくは誰ぞ汝なんじと我の腕かひなり
アカシアの狭霧さぎり漂ただよう道辻みちつじ
疾かけゆくは誰ぞ汝なんじと我の躡あのこなり
移うつろい巡めぐる天地あめつちを
己おのれが父ちちとし母ははとして
のびゆく命いのち何処いずこにか
汝なんじと我の胸むねにあり

三

降りつもる雪ゆきに太古たいこの巨象マンモスを
描えがきは誰ぞ汝なんじと我の感傷おもいなり
夜よもすがら思おもい乱みだれる若人わかくしを
見みつめしは誰ぞ汝なんじと我の恵迪すみかなり
天宙おおぞら駆かける参星オリオンの
幽かそけき光ひかり仰あおぎ見みて
語かたりしことば何処いずこにか
汝なんじと我の胸むねにあり

東雲はるか

(昭和五十七年寮歌)

青木崇君 作歌
栗田成裕君 作曲

一

東雲はるか異郷の地
凌雲の夢馳せ巡る
真理の迤は険しくも
寮友よ力を二にせん
熱き血潮は冷めやらず

二

繁る夏草風渡り
悲しみ隠す屋下り
故なき暴虐忘るまじ
寮友よ怒りを一にせん
熱き血潮は冷めやらず

三

蝸うたう原始林
木洩れ陽ふるう夕まぐれ
思い乱れて暮れる日は
寮友よ祈りを一にせん
熱き血潮は冷めやらず

四

闇の彼方の楡木立
灯透かす青葉蔭
そぞろ歩きにふるう月
寮友よ歩みを一にせん
熱き血潮は冷めやらず

寮友よ永遠に謳歌わん

(昭和五十七年閉寮記念寮歌)

植木貴昭君 作歌
串田厚司君 作曲

一

早緑の道駆けし我
小川に映る延齡の花
今この時の憧憬に
はるか千嶂仰ぎ見ん
心の静庵ここにあり
我が夢馳せし夕暮れに
明日の旅路を想いなん

二

北陵の夏歩む我
今咲きそろうす影のリラ
熱き涙のほとばしり
正義の道貫かん
我等が誇る自治の魂
清雅にはゆる星よりも
深遠にして無限なれ

三

吹雪の中に立てし我
原始の森に先人のかげ
盃かわす寮友と
過ぎせし日々の感激よ
我等が道のしるべなり
我が春遠き北都にも
誓いの絆永遠に

寮生の道

(昭和五十八年寮歌)

泉進介君 作歌
島倉朝雄君 作曲

凍てつきし氷の路も溶けはじめ、見はるかす山に白雪消ゆる頃
集い来し百と四十の若人は故郷も親も銭もなく恃むは己の仁侠ばかり
然れども新たな舎りの恵迪は五層六刃の白亜城
夜も希望の灯は消さず、棲むは豪傑酒乱の徒
さあ来いさあ来い恵迪へ北都に築かん我等が自治寮

春(四月)

秋(十月)

ちよいとそこ行く新入寮生さん
あすは我身か知らねども
大酒くらって逆噴射
これぞ寮生の生きる道

ちよいとそこ行く寮生さん
尻に赤フン巻きつけて
狂喜乱舞す交差点
これぞ寮生の生きる道

夏(八月)

冬(二月)

ちよいとそこ行く寮生さん
弊衣破帽に食糧難
両親の顔が眼に浮かぶ
これぞ寮生の生きる道

ちよいとそこ行く寮生さん
ジャンプ大会 変態か
花の女子大 赤面す
これぞ寮生の生きる道

まとめ

ちよいとそこ行く寮生さん
クラーク精神胸に秘め
天下の北大 恵迪でもつ
これぞ寮生の生きる道

(※前口上は島倉朝雄君の作による)

北に恵めし

(昭和五十八年新寮記念寮歌)

大崎益孝君 作歌
竹中秀文君 作曲

一

北に恵めし若き日の夢
いつかは壊れゆくものか
すがしき朝の光と風は
原始の森に消え去りぬ
今こそ我も旅立ちの時
心の宿よいざならば

二

北の原野を流離い行けば
淡き花影さゆらぎぬ
今も変らぬその涼風に
昔の光偲はずや
流れる雲に孤り謳えば
果てなく夢は何処までも

三

北を望みし岬に立てば
うち寄す波は静かなり
されど遙けき今樺太の
色めく空を憂い眺ん
功利し多きこの人の世に
誠の迪を貫かん

雪の白さに

(昭和五十九年寮歌)

濱田和雄君 作歌
青木毅君 作曲

一

雪の白さに映ゆる我等が恵迪寮
吹雪逆巻く日もあれど
正義の迪を見定めて
真実求むは風の教へなり

二

土の黒さに萌ゆる新たな芽が一つ
雨風寒さに怯ゆるとも
宴討論酔ひしれて
恵迪に根づくは土の教へなり

三

空の青さに育つみんなの自治意識
熱風日干の害あれど
理想高く足は大地につきて
汗を流すは陽の教へなり

四

秋の疾風に聳ゆ大きな林檎の木
頂上の実が墜つるとも
その精神もて糧として
自律目指すは生命の教へなり

沈黙の杜に

(昭和六十年竄歌)

角田勤君 作歌
佐々木徹也君 作曲

一

沈黙の杜に春來告げる
芳香馨し辛夷の花よ
純白き残雪未だ消えやらす
永き寒冬偲はるる哉
郷愁胸に充滿つるとも
されど恵迪此処に在り

二

水恋鳥の哀しき聲に
我故知らず涙流しぬ
短き夏と認識りはすれども
樹々色づきてはや盛夏逝きぬ
哀愁胸に充滿つるとも
されど憧憬恵迪に在り

三

紅雲流るる黄昏どきに
夕細道は幽か続きて
何望むなく彷徨ひゆける
この現身を悲哀しみにけり
愁心胸に充滿つるとも
されど青春恵迪に在り

四

雪舞ひ踊る白銀の世よ
天指す枝柯に樹氷咲く
数多群なす星座の中に
我に向いて天狼星光る
寂寥胸に充滿つるとも
されど経営恵迪に在り

五

弛むことなく唯時は逝き
生きとし生けるものは去りゆく
其は人の世の眞理なれども
限れる生を燃やし尽さむ
追憶胸に充滿つるとも
されど恵迪永遠に在り

陽春新しき

(昭和六十一年度寮歌)

原澤辰明君 作歌

山森聡君 作曲

一

陽春新しき希望満つ
恵迪寮に若き男子等が
野心も赤き夕手稲
嗚呼力もて進まんか

二

盛夏短かくてストームに
太鼓音闇に消えるかな
朝の日露に寮歌の声
嗚呼轟くかこの石狩平野

三

夕暮風の涼しさに
楡の悲しみ知れるかな
雁より暮れる原始林
嗚呼我が憂ひすすろかな

四

北溟粉雪に荒ぶれど
詩を忘却れぬ若人が
理想の存在求めつつ
嗚呼その自治寮創造くかな

五

淡き憧憬に焦れ来る
拙き言葉操りて
胸の内を打ち明けし
嗚呼この青春も早や行かん

六

宴の酔狂も静寂まりて
沈黙の彼方微かなる
郭公の啼声の清らかさ
嗚呼この初夏も過ぐるかな

七

北斗煌く晩秋夜
望月写す支笏湖の波
明日の旅路を思いつつ
嗚呼涙して更くる夜

八

疎々たる原始林に我一人
白雪舞う木立烈風強く
冷徹たき真理索めんと
嗚呼声もなく迪を行く

九

春も巡れる四度に
若き明日の祝極と
南風頻りに頬を打つ
嗚呼この別離永却からず

北斗遙かに

(昭和六十二年度寮歌)

佐久間朗君 作歌

吉田崇君 作曲

一

北斗遙かに広がる波濤煌く水平線
移り行く天水渡る朔風嚴冬の記憶を留めれど
新緑萌す曠野には若き生命の息吹あり
嗚呼季節の芳香満つこの北の大地に
新たなる夢を得て希望かなえん

二

北斗清かに見はるかす紺碧に滲む大空に
輝く光彩燦爛と短き盛夏を彩りて
涼風そよぐ窓下には緑滴る原始林
嗚呼季節の恵み満つこの北の大地に
新しき情熱もて真理求めん

三

北斗豊かに色づける黄金色の大沃野
充足誘う黄昏に遠く彼方を見渡せば
牧場を疾走る若駒の荒土蹴散らすその雄姿
嗚呼季節の実り満つこの北の大地に
新しき力得て正義貫徹かん

四

北斗果てなく包み込む荒び飛び散る猛吹雪
物皆埋み凍てつかせ我らが前途閉ざせども
ひたすら拓くその迪に放歌笑声絶ゆるなし
嗚呼季節の憂愁満つこの北の大地に
新しき意識もて自治を築かん

惡魔死す瞬間

(平成元年度寮歌)

宜寿次盛生君 作歌

田口拓君 作曲

一

惡魔死す瞬間何を凝視る
サタンし と き なに
解けざる呪鬼ヶ島
と の ろい おに が し ま
北溟の国この城に
ほくめい く に し ろ
我旅立ちの時を待つ
われ た び だ と き ま

二

降りたる魔王荒れ狂ふ
ま お う あ
若き生血を吸ひ蘇へる
わ が ち い へん わ れ し
西都の異変我知らず
せい と い へん わ れ し
春欄漫に酔ひ狂ふ
は ゐ ら ん ま ん に よ ひ くる

三

祭終りて黄葉散り
まつり お わ も み じ ち
暗雲広がる秋の空
あ ん う ん ひ ろ あ き そ ら
希望の東光恨みつつ
き ぼう ひ か り う ら
冬將軍が猛狂ふ
ふ ぶ し ゃ う ぐ ん た げ くる

四

白銀の原野は静まりて
しろがね の しず
地獄転じて黄泉の国
じごく てん じて よみ の く に
野人籠りて微睡みて
やじん こも まどろ
今旅立ちの春を待つ
いま た び だ と き ま

我榆陵に — 春行秋哀 —

(平成二年度寮歌)

木村政明君 作歌
田口拓君 作曲

一

足引きの手稲の峰よ
遙けくも偉大なるかな
巖かに夕陽は沈み
山際に映えては著し
黄昏の山並を愛ず
稜線の美しさ永遠に

二

人の世は移ろいやすく
今日の夢明日は空しき
されど葉の散る梢には
潜みたり次代の若芽
ああ友よ理想の世界
いつの日か成るを夢見む

三

並木路は黄金に映えて
秋の日の愁いを誘う
人氣無き小道歩かば
胸に湧け孤高の思い
風に舞え飄飄学徒
いざ守らむ真理の灯

四

瞬くは北斗の星か
我進む道を照らさむ
仰ぎ見む悠久の天
思わずや遠き故郷
夢若き春の旅路よ
我榆陵に清き花咲け

若芽の出づる

(平成三年度寮歌)

柴田一君作歌・作曲

一

若芽の出づる早春に
孤影も辞せぬ若人の
尖風躰を貫けば
漲る大志の息吹有り

二

万物謳歌う盛夏なれど
榮華の闇部忘るまじ
凱風四界を覆へども
鬼哭の嘆きは芯を凍て

三

紅葉吠ゆる秋の窓
落葉瓢の様を見む
疾風怒濤の世なればこそ
真理の迪を一筋に

四

氷雪猛る嚴冬は
心膽練磨の時節かな
烈風大地を劈けど
揺るがぬ我がこの宿居

熱き街

(平成四年度寮歌)

美濃成夫君 作歌・作曲

一
熱き街 冬まだ見ぬ若草よ

丘に騒く黄の芝の

声を勝利歌に

開ける野心は路の上

原始林をたらぬく

二

寄する闇俺の樹はつぶれない

忍びよる業の糧も

鎧袖一触す

積雲に箕微笑む月の面に

孤り気を吐く

三

覇する壁 水晶降る明けの街

静寂の暴君座すれども

生をみごもる

珠のはじける日も近し

息を潜めよ

四

熱き街俺の名は恵迪寮

四山を震わす四股の音に

煩惱は吹き散る

目線めざすは天下第一

迪を極めよ

今日の寮歌^{うた}

(平成五年度寮歌)

小川太郎君 作歌
柳谷信吾君 作曲

一

今日はワシらが風呂掃除
溜まりに溜まった水垢を
何度も何度も擦り落とす
背中を互いに流しあい
湯船につかりて寮歌唸る

二

今日のエッセン尋ねれば
鳥とドンコと里芋と
人参玉ねぎ煮染めなり
喰らふは同じ釜の飯
笑いも絶えぬこの団居

三

今日の議論は長かった
今や褥に突つ伏さん
窓の外には初冠雪
夜も白みて鳥は啼き
紫雲に明けは染みていく

四

今日の飲みは遺跡の地
夜空に瞬く星の海
安焼酎を酌み交わし
男と男が涙する
ここが恵迪俺がやる

六華ぞ窓に

(平成七年度寮歌)

宇野直哉君 作歌

永田将人君 作曲

一

六華ぞ窓に刻まれる

灯灯ともされて

家家の街に散るほど

まみえんとすは

迷走の土と初なる乙女

鈍き銀なる空の下

暖かき片隅求むる若人等

三

白き岩肌かいなとり

登りて伝う水の城

折しも巖の潤い映えて

光の花の冠受くを見ゆ

この灼熱よこの碧水よ

たどりこし我等が

魂まで飛沫せよ

二

時効なき戦争裂かれたる

一会の愛の光芒と

時代に澱の沈むを見つつ

新興の今何かを思う

世にふる柳の薄緑

岸に萌えただよ

しだれて音もなく

四

別るる道を限りとて

露けき草にさし入るも

月日に添えてうち紛れず

思い乱るる面影に添う

友の一言軽からず

肝胆相照らしき

月影燦然と

五

残照長く尾を引けば

安らぎ満ちて夜の声

さらば我が土中の碧の

その重みこそ出会いし歓喜

新たな一歩しるしつつ

忘るまじ清き

華かなる憧れを

若き力

(平成八年度寮歌)

長谷川健君 作歌
石井英一君 作曲

一

高鳴る胸の血潮巻く

熱い情熱に身をまかす

ただその意気を信じつつ

堂々迪を拓きゆく

我は泰山北斗の身

二

彼何者ぞ何かある

我が若き力奮起せば

鎧袖一触地に碎き

天にも響け「嗚呼パンカラ！」

憂い忘れよ杯を酌め

三

希みは高しけつ青し

芙蓉万里の風を待ち

しばしおさめしこの翼

雄図を胸に刻みたる

鴻鵠の志をだれ知るや

昇龍の夢

(平成九年度寮歌)

長谷川健君 作歌
石井英一君 作曲

流転行路に我仰ぎ見る

桃色空に龍の雲

我昇龍の夢に入る……

霞こめ雄き林を抜け出でて

辿り着きしががふるさとの

垣根は山河陽はおちて

大いなる水海に月映ゆる

ふるきよき力強きふるさとに

はぐくまれし嗚呼我は

不壊の哲い引き提げて

龍のごとくに昇りゆく

しかれどもいつしか其れも身を移し

昔を偲ぶ此の我に

時の流れを感じつつ

今あたりを見渡せば

新しき世界の広がり新しき

ものここに見て我思う

「彼の哲い引き提げて

若き力で昇りゆけ」

ふと仰ぎ見る紅空に

龍の雲は形くずし流れゆく

天地人

(平成十年第九十回記念祭歌)

一谷英樹君 作歌
長谷川健君 作曲

一

紅天かなた 大鷲舞いて
茜さす朝 陽も映ゆる
天より落つる カムイの瀑布
地に轟くや
夜気高まりて 銀漢の群星
きらめくや
北天望み 九十路
大いなる 能力求めん

二

簞ゆ連峰 果て無き眺望
猛き心を 駆き立てぬ
北嶺の樹海 深遠成して
我を呑み込む
無限緑野 静寂の中に
満月と飲む
北土佇み 九十路
澄み渡る 瞳視つめよ

三

臥竜の牙 深淵潛み
鳳雛の翼 時機を待つ
誇り語り 現在記念祭
奮起飛び出でよ
我らが魂 はや九十路
沸き立たん
青人満ちて 九十路
狂おしき 滾りほとばせ

生命萌え出で

(平成十年度寮歌)

小日山輝泉君 作歌
長谷川健君 作曲

一

生命萌え出で 輝く榆陵に
真白の翼 蒼空高く舞う
仮寝の宿に 我が身はあれど
風行く先に 心は駆ける

二

謳歌いて暮れる 晩秋の夜
篝火染める 紅の頬
今燃え上がる 一瞬の夢
我達の滾 夜空を焦がす

三

凍てつきし 原始林 髪凍る小路
聞こゆるはただ 白雪の声
大地清める 白銀の露
眠る若芽は 何をか夢む

四

雪残る 春寮友の門出に
共に歩むは 月光の路
果て無く 続く 指標 無き旅
野心を胸に進みて行かん

清華の誓

(平成十一年度寮歌)

荒木洋祐君 作歌
小出隆広君 作曲

一

雪舞う地平にひとときわ映える
六華の紋ぞ我等が砦
野心は満ちて冬空焦がし
樹間の風は情熱を運ぶ
杯に写る未来をみよう
夜明かし語るこの今にこそ
カペラの歡智オリオンの武勇
天よ闇よ我等に賜え

二

国を覆い地球を揺るがす
四百志士の夢よ醒めよ
太平洋にかかる橋にぞなれる
我等がゆくてに光あり
寮で培う時間を糧に
いざうちつれて歩み出そう
北の都に世紀はめぐり
清華の誓今ここに

若人よ

(平成十二年度寮歌)

野路直之君 作歌
村中剛洋君 作曲

一

春風興しゅんぷうおこせ我が若人わが若人よよ
大地ちちを君きみの色いろに染めよ
理知りち無なかりしも血氣けつき注そそがば
光明ひかりの迪拓みぢひろかれん

二

使命しめいは未いまだ君等きみらが華はなぞ
捧ささげよ汝なが情熱おもい
留とどまり酌くみてただ人ひとを待まつ
尽つきる事ことなき我が希望のぞみ

(※繰り返し)

三

別わかれは近ちかく再であいは遠とおし
巢す立つ友等ともらの愛いとしさよ
君きみの比翼ひよくの鳥とりとなりたし
翔かけめぐらんかな共ともに

(※繰り返し)

(※)

涙なみだたぎりて白雲くもを流ながせば
満つき月われらも我等わたを讃たたへんや
一いっし矢たけの猛せいりゆうりが青竜せいりゆうとなりて
天てんに昇のぼるは今いまこの時ときぞ

蒼天へ

(平成十四年度寮歌)

上川雄之君 作歌
千葉直樹君 作曲

一

翠あおき早さみどり緑りあまりに深ふかく
若わか葉はに臥かせし風かぜ吹ふく榆お陵かの
寮こで培つちかうこの大お志もい
寮とも友ともとの絢ゆ夢めは東しの雲の明めかり
佇たたずみ移うつろう憧あこがれを
今いまこそ我わが身みの翼つばさと成なさん

二

碧あおき雪ゆき迪みちあまりに長ながく
星ほし影かげ映はえし原げん始しの森もりを
放さまよ浪よい往ゆかんはこの恵のみ
心しん緒じゆ乱だれて我わが身みの果はても
折おれぬ野こ心ころを誓ちかいつつ
六りっ華かと月つきを燈とも火しに

三

蒼あおき天てん空くうあまりに広ひろく
榆にと風かぜとに我われ等らは宿やとる
魂たまの懊な悩やみは雲くも散ちら
新あらたな雄お叫なび羽はばたきに
大おおいなる生せい命めい抱かえ得えて
飛とび発たたんいぎ北ほく斗との雄ゆう途と

ああグツと

(平成十五年度寮歌)

井口拓君 作歌
持田翼君 作曲

一

もしも海が酒ならば
お前は魚になるといふ
俺は渚の貝になる
波が来るたび酒を飲む

二

つまみはそうさ俺の脳
酒にとろけた脳みそさ
代わりにお前を一盃に
空の頭蓋に酒を注ぐ

三

明日は泥土に墜ちるとも
今は昇らんはしご酒
美しい盃を重ねては
その身月にも届くべし

四

盃もめぐりて今や今
魍魎魍魎が顔を出す
ヤマタノオロチ現れる
大トラ小トラ管を巻く

五

更け行く夜に浮かぶ月
窓辺にうつる影は今
何をし何をされるのか
月は黙って見るばかり

六

中天高く日は昇り
今日もマグロの大漁旗
死屍累々の戦場に
兵どもが夢の跡

七

天の夢から落っこちて
今日は地を這う宿酔
「なぜ繰り返す過ちを」
空しく響くいつもの問い

八

積んでは崩す盃は
賽の河原の石積みか
それでもいつか天に着く
その日を信じ盃を酌む

九

とかく憂の多い世を
されば払えよ玉帚
積もる芥の流れては
自ずと心開くべし

十

たとえ百年生きたとて
わずかに三万六千日
されば尽くさんこの盃を
一日必ず三百杯

折れたポプラよ

(平成十六年度寮歌)

高橋直樹君 作歌

山口駿君 作曲

一

折れたポプラよ

おまえは何を言わんとす

酒注ぎ交わし乾した夜の

見上げた月の傍らで

おまえの匂いが映らない

心配せなや友達よ

永久に変わらぬ継いでやる

たとえこの世が変われども

俺や寮友らが歌うだろう

いのちの継ぎ目が終われども

心配せなや友達よ

お前は此処に生きている

二

折れたポプラよ

おまえは何を言わんとす

緑が踊る夏の日も

茜に溶ける秋の日も

同じ生命を供にした

肩を組もうぞ友達よ

俺とお前は同じ土

側になくともその根が

歌声や思いを繋ぐだろう

その身朽ちゆく運命ども

肩を組もうぞ友達よ

次代がお前を芽吹くだろう

三

折れたポプラよ

おまえは何を言わんとす

別れの雪を踏みしめて

固め歩んだ迪の未来

春の色する夢なれや

供に称えん友達よ

思うは日々をいたずらか

過ぎせる時間の限るに

尽きぬ涙は言足りず

見つめる春は違えども

供に称えん友達よ

六華が我等照らすかな

遙かなる迪

(平成十七年度寮歌)

加藤信泰君 作歌

福岡萌君 作曲

一

繁滋^{はんじ}なる

思いを秘^ひして寮^{まなびや}の
門^{もん}をくぐりし若人^{わうじん}は

意気^{いこ}試^{ため}され育^{はぐく}まれ

熱^{あつ}き契^{ちぎ}りの友^{とも}を得^えん

楡^{いれ}の若葉^{わかば}曜^{かがや}くごとく

遙^{はる}かなる迪^{みち}に根^ねを張^はらん

二

時^{とき}は過^すぎ

大地^{つち}に根^ねを張^はる若芽^{わかが}らは
思い託^{たく}され懊惱^{おうのう}しつつ

切磋^{せつさ}琢磨^{たくま}し歩^{あゆ}む毎^{ごと}

寮^{まなびや}支^さえる大樹^{たいじゆ}とならん

祭^{まつり}の燈火^{あかり}曜^{かがや}くごとく

遙^{はる}かなる迪^{みち}を継^つぎ行^ゆかん

三

何時^{いつ}の日^ひか

此^{ここ}処^こで学^{まな}びしひとごとが
かけがえのない寶^{たから}とならん

別^{わか}るる友^{とも}に思^{おも}いを託^{たく}し

旅^{たび}立^だつ未^さ来^きは暗^{くら}くとも

雪^{ゆき}野^のに朝^{あさ}日^ひ曜^{かがや}くごとく

遙^{はる}かなる迪^{みち}に出^いで行^ゆかん

ただ一心に

(平成十八年度寮歌)

岩崎良平君 作歌
吉田和史君 作曲

一

紺碧こんぺきの空そらを貫つらぬく

一筋ひとすじの白雲くも

無限むげんの可能性おもし我が胸むねに秘ひめ

広がれる迪みち

ただ一心いっしんに信しんじ歩あゆもう

二

漆黒しつこくの闇やみを貫つらぬく

静しずかな月明あかり

内うちなる大志おもし息いきを潜ひそめて

開ひらかれる朝あさ

ただ一心いっしんに信しんじ臨のぞまん

三

臙灰ろうかいの雲くもを貫つらぬく

揺ゆるがぬ意思こころ

昔年せきねんの想おもい翼つばさと共ともに

光差ひかりさす先さき

ただ一心いっしんに信しんじ飛とび立たつ

四

真紅くれなゐの心しんを貫つらぬく

熱あつき眼差まなざし

叶かなわぬ夢おも友いとらに託たくし

新あらたなる迪みち

ただ一心いっしんに信しんじ進すすもう

恵迪小唄

(平成十九年度寮歌)

井関俊介君 作歌
八城雄太君 作曲

一

金がないのが最初の縁で
入ってみたのは良いけれど
すみかはポロ屋に得体の知れぬ
上の年目が一絡げヤレ
思えば遠くへ来たもんだ

二

大志抱きて北都へ来たが
気付けば朝寝に高いびき
自分は違うと言ってはみたが
サア明日から頑張るぞヤレ
朱に交われれば朱くなる

三

酒を飲み飲み話もすれば
突然ドンパと突っ張り合い
時には突き上げ時には日和り
奴より俺の方が上ヤレ
同じ団栗せいくらべ

四

先は長いと思っけていても
時間の経つのは早いもの
苦業を伴に住んではいたが
避けては通れぬ別れ道ヤレ
縁は異なるもの味なもの

星の舟唄

(平成二十年度寮歌)

黒瀬智子君 作歌・作曲

一

雪どけ五月晴れ短い夏の日々
黄金のいちよう並木くぐれば木枯らし
あしたも同じ夕日が沈むだろう
青春は退屈だと誰か歌う

二

まどろむ子守唄人生の哲学
雲にかくれて消える木もれびの夢
眠りをさまようまぶた開けば
まこと学成りがたし月が笑う

三

悠々暮らすこの若さを持って余し
港にたどりつくさだめなき小舟
目じるし一つの星追いかければ
流星雨のこどく目をくらます

四

あまたの先人が説く壮大真理
この脳はそ知らねども目の前にあるは
瞳の暁うつくしき人
千の論説より多くを語る

五

つつましい志が正しき答えか
道草のかたわらに咲く花もある
学べよ遊べよ恋せよ舟は
風が導くままに青き帆を張る

雲海貫く

(平成二十年第百回記念祭歌)

石井翔君 作歌
木川明音君 作曲

一

雲海貫く泰山に

伍山を覇せと吼える熊

俗野に満てる四面の楚歌を

真理のたけびで吹き飛ばす

マツリダマツリダ

マツリダヒゲマ

二

混迷尽きぬ泥濘に

曲学阿世くたく虎

世をまどわす混沌ぬえを

真理の瞳で睥睨す

マツリダマツリダ

マツリダモウコ

三

濁流荒ぶる大飛泉

己身一つの六六魚

時の趨勢物ともにせず

龍に転せと登りゆく

マツリダマツリダ

マツリダオロチ

四

流れに流れ一百年

祭りに祭って一世紀

真理を求む若学徒

今ぞ狂いて大宴

マツリダマツリダ

マツリダゴッホ

六華雪解に

(平成二十一年度寮歌)

丸田潤君 作歌・作曲

一
六華雪解に佇みて

故郷を去りし若人が

清き野心を胸に秘め

しばし憩わんこの宿舎

二

酒飲み宴し夜は更けて

明く迄語り日々は行き

燈火闇に浮かび出づ

輝き永久に絶やさずや

三

理想の自治を手にするは

常に寮生が高みなり

崩れゆくこの時にこそ

不断の尽力忘るまじ

野性に吠えろ

(平成二十二年度寮歌)

林祥史君 作歌・作曲

一

静かに暮らす

憂さ晴らしより

生き恥さすらい

なすがままに

野性に吠えろ歌えよ踊れ

野性に吠えろ狂えよ狂え

二

訪れ去りゆく

底なしの日々

慰安を求めど

言葉は足りず

野性に吠えろ歌えよ踊れ

野性に吠えろ狂えよ狂え

三

思い出すたびに

記憶はうすれ

枯れ葉の紅

落陽に散る

海の碧さを伝えておくれ

空の高さを伝えておくれ

野性に吠えろ歌えよ踊れ

野性に吠えろ狂えよ狂え

広がるはただ青き旅路ぞ

(平成二十三年度寮歌)

安田龍平君 作歌

我如古弥司君 作曲

春風吹きゆく原始の森に吾れ微睡みて酒宴して逍遙すれども其の歩は止まず
危急の時代にあればこそ渦巻く疾風吾が勇を呼び怒涛は汝れに義を求む
今ぞ吾等が誠を奮い高唱いて進まん青き旅路を

星は昂々美稲超えて

玉黍を食む旅鳥や

染まず彷徨う其が白羽に

斗星と大志の結ぶ瞬間

広がるはただ青き旅路ぞ

月は朧々輝光は幽か

梢叢分けて河に落つ

水面に透ききみが底に

己が混濁をうつし見て

孤月仰ぐ子よ誰が為に泣く

花は灼々壤撃つ酔いを

君影草の鈴音にさく

さればこの手を春陽高く

翳して情熱をうち燃やし

濃緑に萌ゆ白花に誇らん

雪は皚々大地軋めて

氷嵐まさに街を呑む

無明の曠野に巨熊眠るも

弦を矜持と爪弾けば

嗚呼黎明に吹雪も霧散す

宙は悠々逍遙の果て

芝草を枕に星を抱く

有情の声に朋友和す寮歌を

讃えて天宙を見上げば

広がるはただ青き旅路ぞ

快速エアポート

(平成二十四年度寮歌)

丸田潤君 作歌・作曲

(※)

快速エアポート僕を乗せ汽笛を鳴らして駆け抜ける
旅行者達は両腕に白い恋人提げている
車窓流れる街を背にカンバの林を抜ければ
僕はもう独りぼっちさよなら youthful days

一

思い浮かぶ四年前の春のことその時も
僕は独りこの列車に揺られていたよ
希望に膨らむ夢と一分の不安抱えて
雪の残る窓の外を眺めてた

(※繰り返し 白い恋人をじゃがぼつくるに変える)

二

思い掛けず頬を伝う一筋のその涙
別離の先明日へ向かう決意の証
二度と帰らぬ青春あれは夢か 幻か
だけど僕は紛うこと無く寮に居た

(※繰り返し 白い恋人をジギスカンキャラメルに変える)

北溟の我らぞ

(平成二十五年新々寮三十周年記念寮歌)

森貝聡恵君 作歌
菊池玄之介君 作曲

一

君何故来たるこの北溟の地に
かの師の教へ受け継ぎし地に
貴き野心ゆめ忘るまじ

ひたと気高く

いざ踏み出さむ新たなる夢へ

二

野心は強く熱くとも

道草恋しき時もあるかな

青き春の夜友らが宴

語り合おうぞ

我らが大きき夢の芽

三

我らが未来はいかなるものか

曇り澱みし過去ではあれど

これより先は我らが拓かむ

先達に続け

大和の栄えをば担うは我らぞ

二つの春

(平成二十五年度寮歌)

丸田潤君作歌・作曲

一

降りしく雪は終るを知らず、未だ窓下には白銀の町。
されど陽光は日毎に増して、春の訪れを微かに予感う。
幾許もせず別離の時は来て、寮で過ごせし日は想出となる。
雪上の足跡融け去り消ゆるよに、巢立つ若芽も晩冬と共に去り行く。

二

残雪融かす春風吹きて、原始林陰に萌ゆる新芽は踊る。
生命の鐘声は北都を巡り、長き寒冬の影は消え往く。
去りし寮友との月日胸にして、新たなる一年の扉を開く。
若き我等の熱き血滾らせて、ひたすらに只青春を歩みて行かん。

姫月に重ねて

(平成二十六年 度 寮 歌)

松元一平君 作歌
寺尾佳隆君 作曲

観月過ぎゆく晩秋の夜、穹蒼の天空高く舞ひたる月は今宵満つるかな。
その清輝に映えし姫が鏡水は、鹿が純瞳に宿らむ。
月影は鹿を誘ひ来たりしこの神無月に何をば見せむ。

一

時移ろひて人世は変われども
今宵も満月は我らを照さむ
夜の邪帳をはらはむと
流歩む汝は楡に似たれど
風流を掴まむ芽に感ず
風習に付和せし
狗と成らざらめや
さて映りこむ我が鏡瞳に
風習だに愛づるその気概

二

清澄みたる想ひ知る由もなく
今宵の三日月は川面に映らむ
かの日の月影とは違へども
人世に充つ解答を自ずと心得
此れは汝の求望にか
漲る想ひなどか劣らむ
さて映りこむ我が鏡瞳に
身を委ねばやその清流

三

静と唸りし雨霽したたれば
今宵も我は朧月を仰がむ
姫が麗姿を追憶ふべく
汝が想ひは涙と落流れ
透かし斜光にさらさるる
閉じなむ凌雲よこひ願はくば
さて映りこむ我が鏡瞳に
嗚呼汲まれたしその厭心
悲しかりけむ晩秋の夜は
月影映えて人影も追ひ得じ

咲く六華よ

(平成二十七年年度寮歌)

鈴木美奈君 作歌
小松遼貴君 作曲

一
学^{まな}び^や舎^の野^にに^さく^は六^は華^なよ
我^{われ}ら^を招^{まね}く^北寮^の幸^{さち}
大^の望^ぞ麗^みし^この^道に^{みち}
名^{めい}花^い丈^か夫^{ます}集^すい^来る^く

二
涼^{すず}風^{かぜ}に^舞う^箱柳^{なぎ}
寮^う歌^た鳴^なり^響く^夕餉^け時^{とき}
先^{せん}人^{じん}継^つぎ^し一^ひ途^{みち}を^ち
未^まだ^踏み^ふ初^そめ^し寮^{われ}友^らなり

三
楡^ゆ影^{えい}傾^{いかた}く^夜の^静寂^{じま}
微^ま睡^{どろ}み^知ら^ぬ 蔦^{つた}住^す居^{まい}
憂^{うれ}い^の醒^さめ^ぬ 世^よの^岐も^{みち}
満^みち^行く^若月^{つき}が^照ら^すか^な

四
季^き節^{せつ}巡^{めぐ}り^て朔^か風^ぜは^風ぎ^な
無^む何^か有^うの^郷を^離る^時ぞ^{とき}
嗚^あ呼^あ忘^{わす}る^まじ^き我^わが^迪の^{みち}
齡^よ延^{わい}べ^たし^青き^春^{はる}

此の寮よりの児

(平成二十八年 度寮歌)

小松遼貴君 作歌・作曲

一字いちじうに集つどいし青あお二才にさい共に三途さんずの川かわは未まだ遠とほく
四しの五ごの言いわずも六華りっかで過すごさば北斗ほくと七星背しちせいを照てらす
八紘はつこう辿たどりて九遠きゅうきを巡めぐらん十色じしきの明日あす日ひへといざやいざ

抒

北きたの都みやこに若人わにうぢが

大きおおなる理り想め抱かえ来きて

明あける月夜つきよに継つがれる人な情なさけ

飽あくまで語かたり前途さき見み遣やれ

寮清みずきよければ我等うおす住すまぬ

把

恵めぐみの雨あめも降ふりしきり

迪みちを呑のみ込こむ時とき化け呼よべど

帆ほを張はれば平たいらぐ濤なみ燦さん然ぜんと

確しかと舵かじ取とれ其その身み空そら

我等うおの寮得みすえたるが如ごとく

究

寮りょうで相あい撃うつ竜りゅうと虎とら

歌うたい響ひびかす己おのが志たいし

琢磨たくまし君きみと此こ処こ寮りょうを以もつて

咲さきつ根ね張はり胸むねを反それ

我等うおと寮みすとなれこの日ひ々びよ

不香の花ぞ

(平成二十九年 degree 寮歌)

冠花君 作歌

佐藤亮君 作曲

一

不香の花ぞ柔らかに
霊舞い遊ぶ繊細の
樹間に薫る雪煙
白妙綻ぶ棹透り
蒼空麗しき北の幸
憂き世肴に耽る子ら
枯淡の美にも感激ずや

二

血潮滴るナナカマド
落葉千々に原始林を抜け
雪の波打つ海原か
振れば残映光なく
枯れ蔓覆うこの寮に
自然に根ざす孤独得て
冬の無情な愛を知る

三

散ればこそよと小夜嵐
喧騒遠く鎮まりて
銀壺に燃ゆる胸の中も
愁い込めたる赤天も
黙す吹雪に命呷ゆ
厳しき雲海に唯独り
帆立つ遊子馳せし滯

蔦壁照らす

(平成三十年第百十回記念祭歌)

小田嶋元哉君作歌・作曲

一
蔦壁照らす 赤き火は
ひやくとおつた
ひやくとつた
ひやくとおつた
ひやくとおつた

百十伝わる 篝火よ
もろごえ
もろごえ
もろごえ
もろごえ

諸声上げよ 意気高く
いきたか
いきたか
いきたか
いきたか

寮友に負けじと 先へ行け
さき
さき
さき
さき

二
星降る北は 赤き空
あか
あか
あか
あか

汽笛が街を切り裂けば
きりさけ
きりさけ
きりさけ
きりさけ

応え轟き廻る酒
めぐるさけ
めぐるさけ
めぐるさけ
めぐるさけ

君よ恵迪北の星
ほし
ほし
ほし
ほし

三
炬燵布団で 蠢くは
うごめ
うごめ
うごめ
うごめ

明日を夢見る 若学者
わかがくしゃ
わかがくしゃ
わかがくしゃ
わかがくしゃ

その身醜くあつたとて
みにく
みにく
みにく
みにく

君が心よ 清からん
きよ
きよ
きよ
きよ

四

秋早去りぬ 朝ぼらけ
あきはやす
あきはやす
あきはやす
あきはやす

靄こめ朝日 赤き槍
あさひ
あさひ
あさひ
あさひ

一振り天を割りたまえ
てん
てん
てん
てん

君ぞ苦難の 望みなれ
くなん
くなん
くなん
くなん

五

新しき日々 朝は来た
あたら
あたら
あたら
あたら

君忘るるな その心
きみわす
きみわす
きみわす
きみわす

二百の階段 第一歩
ひやく
ひやく
ひやく
ひやく

歌え 笑え 誠なれ
うた
うた
うた
うた

広がりし海原に

(平成三十年度寮歌)

樋浦一希君 作歌・作曲

一

春あけぼのの夢に見て
カムイの声に導かれ
舟をこぎいで流れ来ぬ
北都夜明けの金字塔
広がりし草原にひとりたち
はるかなる大雪の山
のぞみみん

二

夏宵闇の緑風に
森が葉音を雨ときき
榦の木立をさまよえば
紅はゆる山小屋ひとつ
広がりし高原にひとりたち
はるかなる天空の星
身に浴びん

三

秋夕暮れの鹿の声に
恵みの季節は過ぎゆきて
入日の茜に涙する
冬音せまりき危機焦燥
広がりし牧野にひとりたち
はるかなるシベリアの風
気も霧散す

四

冬つとめてのゆめうつつ
かそかに遠く銀狼の咆哮
凍てつく寒さに身を起こし
胸に秘めたる青写真
広がりし雪原にひとりたち
はるかなる白雲の頂
旅に追ふ

五

今祭日の猛き火よ
寒風蒼碧を買かん
大地を揺るがして嵐おこる
新風破天の新時代
広がりし蝦夷に寮友は和し
はるかなる先代の魂
解き放つ

奔る流れ

(令和元年第百十一回記念祭歌)

樋浦一希君 作歌
伊藤小雪君 作曲

一

曇天低く晴緑の山
曇 どんてん 低 ひく 晴 せい 緑 りよく の 山 やま
高くみあげて岩打つ波間
高 たか くみあげて 岩 いわ 打 う つ 波 なみ 間 ま
静寂の底に力を秘して
静 しじま 寂 じ の 底 そこ に 力 ちから を 秘 ひ して
揺れては消える蒼銀の魚影
揺 ゆ れては 消 き える 蒼 あお 銀 ぎん の 魚 か 影 かげ
未蓄は満ちて華ならん
未 み 蓄 らい は 満 み ちて 華 はな ならん

二

急滝高く紅の木々
急 きゆう 滝 うりゅう 高 うたか く 紅 くれ ない の 木 き 々 ぎ
散る葉をうけて渦まく白泡
散 ち る 葉 は を う け て 渦 うず ま く 白 しろ 泡 あわ
一瞬ここに己を賭して
一 ひ 瞬 とせう こ こ に 己 おのれ を 賭 と して
白銀に煌めけ緋赤の川面
白 びやく 銀 ぎん に 煌 きら め け 緋 ひ 赤 せき の 川 かわ 面 も
祭りは咽く華たれや
祭 まつ り は 咽 なげ く 華 はな た れ や

三

月影長く原始林を貫き
月 つき 影 かげ 長 なが く 原 も 始 り 林 りん を 貫 つらぬ き
街影映す学舎の流れ
街 まち 影 かげ 映 う つ 学 まな 舎 び の 流 なが れ
刹那輝き我今生きて
刹 せつ 那 な 輝 かがや き 我 われ 今 いま 生 ま じ て
札幌に舞う川辺の銀鱗
札 ひとざと 幌 と に 舞 ま う 川 かわ 辺 べ の 銀 ぎん 鱗 りん
咲くは次代の華なれや
咲 さ く は 次 じ 代 だい の 華 はな な れ や

榆陵を仰いで

(令和元年度寮歌)

佐藤亮君 作歌・作曲

一

嗚呼悠遠き日の燈よ
我らが自由を映しなん
今宵風が火を掠め
燭台鈍く声漏らし
枯れ蔓綻び覗かせて
仄かに蟬は細くなりゆく
されば問え己が心に
我が胸内は寮が誇りよ

二

嗚呼悠遠き日の鞆物
流転の輝き放ちなん
嘗て疾風に先人は
掴み離さず此れを継ぎ
擦傷僅かに見ゆれども
威風今こそ我が手に至る
されば感ず時潮の想い
手に得し重み寮が誇りよ

三

先人残せし貴き野心の
それにも優る縁在り
いづれ別れるその運命まで
囲み語らい己が未来創れ
榆陵の片隅我が故郷は
斯くあるべしと誰か言う

鴉翼の影

(令和二年度寮歌)

落合海宇君 作歌
加納央都君 作曲

一

雲居くもいの空そらに黒銀こくぎんの羽はね

六華りっかの深緑みどり薄れゆき

二豎にじゆの魔ま北溟ほくめいの地ちを蝕むしばみて

鴉翼からすはなにをか鳴なかん

二

空そらの鏡かがみに夜よさりの事跡じせき

若人わかとの光迪ひかり幽かそけきものへ

闇やみの暗夜よ浣澗はつらつたる影かげを牽ひきて

鴉翼からすはなにをか知らん

三

朝明あさけの風かぜにたなびく黒翼つばさ

陽ひは悠揚ゆうようと手稻ていねの山端はしに

春はるの芽吹めふき静寂しじまの榆林ゆりんの中なかに

鴉翼からすはなにをか語かたらん

北嵐

(令和三年度寮歌)

吉野萌君 作歌
加納央都君 作曲

詩

呑めよ集へや酔ひ狂へよ
踊れよ唄へや笑ひ狂へよ

一

月の随に盈ちゆく淡燈
蛩歌を肴に飲酒盃空け干さば
深宵まで痴れて泥のよに伏す
朝そら朧にて心と戯る
娑婆の夢

二

なべて蓬萊は揺蕩う蜃気楼
響む晚鐘花零る沙羅双樹
畢竟浮世は泡沫よ
影映す般若湯酌みて禊がむ
根無草

三

三界流転に息つく隙もなし
ふる星霜に道途別たれど
廻り流れて逢はむとぞ
コチャ杯交わせし
彼我の郷里は熊ぞ棲む
蝦夷ヶ島

星よ色褪せよ

(令和四年度寮歌)

上野颯太君 作歌
渡辺麗菜君 作曲

一

蕾綻ぶ香山つぼみほこうざんの

雪解ゆきげはいづこや鹿仔しかごの眼め

神かみの食指しよくしは北きたを向むき

羊牛ようぎゅう摂理せつりの空そらを喰はむ

烏合うごうは楡エルムの影縫かげぬわん

星ほしの燈ともる野湯のゆ

二

最果さいはて憂うれぶ那由多なゆた雲ぐも

つまらぬことは不吞夜のめじよる

時代なみに揉もまれた酒さけに酔よひ

銃唄ちゅうば素知そしらぬ寮りょうの歌うた

夜通よとおし宵越よいこし洄遊魚かいゆうぎょ

星ほしは明日あすも寝ねぬ

三

雪路ゆきみちを征ゆく璞玉あらたまよ

星紋寮せいもんりょうとは誰たれ気きづく

いかれ旦那ぼんちや虞美人ぐびじんの

出逢であいと別離わかれが恵迪町けいてきちょう

死人しにんに朽くち無なし

さらば寮族ととも

星ほしよ色褪いろあせよ

あらうれし

(大正元年桜星会歌)

横山芳介君 作歌
柳沢秀雄君 作曲

一

あらうれし
我等が生命は若ければ
熱き血潮 強き氣力に
漲る春日の 光ぞ匂ふ
あはれ吾が友
櫻と星に 明暮を
契固めて 共々に
學ぶはうれし 美しき國

二

あらたのし
我等が心は若ければ
高き希望 深き思想に
湧き來る泉は 汲めども盡きず
あはれ吾が友
學びの苑は 常磐なり
狂ふ波折の 世に立ちて
進むはたのし 懐しき國

朝葉末の

(第三期卒業生贈桜星云歌)

加藤義夫 作歌
角倉邦彦 作曲

一

朝葉末の露を受け
夕歸鳥の影宿し
曙匂ふ石狩に
玉の泉と湧きしより
思へば茲に三歳の
過ぎにし水路を偲ぶ哉

二

大気は凍り雪もやの
荒れし廣野の面をこむ
時しも高く天界に
光芒強き北極星
いさごとと光る星くづは
我をばめぐり走るなり

三

かつらの若芽色も濃く
森に生氣の溢る時
奇しき天地の靈受けて
大和心と咲き出でし
蝦夷の深山の山櫻
我等が理想此處にあり

四

雲漠々に水ゆるぎ
大野の心我にあり
眞理求めて息まざる
久遠の望我にあり
衆愚の聲にまどはざる
我に男の子の覺悟あり

五

消ゆる榮華を夢に見て
虚しき名をば人よ追へ
北の荒野に三百の
健兒浮雲を嘲りつ
永遠に變らぬ美土に
注ぎし汗の寶を求む

六

黄花の牧に新緑の
森に鍛へよ鐵の腕
紅葉彩どる野に山に
吹雪の里に思想鍊れ
勉めよ奮へ我友よ
やがてぞ起たん時は來ん

島浪かへる

(大正三年桜星会歌)

木原均君 作歌
岩崎直砥君 作曲

一

島浪しまなみかへる北溟ほくめいさして

石狩いしかりの水末みづすゑ遠く

霞かすみのあなた流る、郷土くどに

あけくれなれし我友わがともの

學まなびに集つどふ楡影ゆえいの庭にはに

絢爛けんらんの春はるまたおとづれぬ

二

春陽しゅんやうのもと下崩したもえそめて

遙はるかなるかな我思われおもひ

無相むそうの智慧ちゑを追おひ求もとめつ、

無明むみょうの闇やみをわけ入りて

生命いのちの流ながれ深ふかくも進すすむ

雄々をしき學徒がくとこ、北きたにあり

流るる光途 (大正七年桜星会歌)

一

流る、光途重ね来て
星霜此處に四十年
北斗の光眸さす所
櫻かざして先人の
樹立し歴史を偲ぶ時
誰か血汐の湧かざらむ

二

咽ぶ悲憤の誓より
早や七年の春うつり
人は変遷れど三百の
健兒不滅の意氣を持す
いでや謳はん北州の
精力に満ちし凱歌を

三

陽春の光に覆翼まれ
嫩草萌ゆる北の郷
手稲の麓健兒等が
燃ゆる想を合唱せば
牧場の彼方際涯しらず
高鳴たて、響きゆく

四

豊平川の夏の夜や
玉兎の踊る波の上
自治の流の悠久を
語る川邊に佇めば
ありし往昔を追憶へとや
古塔に響く時の音

五

こ、石狩の大沃野
静けき秋のめぐり来て
天紺青の色ふかく
地は豊穰なる平和境
人は有情の美しき
自然の愛に狎る、哉

六

萬里茫茫雪の海
白龍怒り風叫ぶ
吹雪にさめし 暁や
迷の雲をおしひらき
常世の幸を恵むなる
お、紅の朝日影

七

北辰冴ゆる夕まぐれ
ボーイズビー
アンピシアスの
崇高き教を胸に秘め
エルムの梢とことほの
自由の調聴くところ
若き生命を誇らばや

瓔珞みがく

(大正九年桜星会歌)

佐藤一雄君 作歌

置塩奇君 作曲

一

瓔珞みがく石狩の

みなもとどほ

源遠く訪ひくれば

原始の森は闇くして

雪解の泉玉と湧く

雪解の泉玉と湧く

二

浜茄子紅き磯辺にも

鈴蘭薫る谷間にも

愛奴の姿薄れゆく

蝦夷の昔を懐ふかな

蝦夷の昔を懐ふかな

三

今円山の桜花

歴史は旧りて四十年

吾が学び舎の先人が

建てし功はいや栄ゆ

建てし功はいや栄ゆ

四

その絢爛の花霞

憧憬れ集ふ四百の

健児が希望深ければ

北斗に強き黙示あり

北斗に強き黙示あり

北斗に強き黙示あり

五

醜雲消えて人の世に

陽光はうららかに輝けど

風の名残のつきやらで

狂瀾さわぐ今し今

狂瀾さわぐ今し今

六

潮に暮るる西の空

月も凍らむシベリアの

吾が皇軍を思ひては

猛けき心の躍らずや

猛けき心の躍らずや

七

白銀狂ふ埋れ路も

踏みて拓かむわが前途

はろけき牧場に嘯けば

雲影はやし草の波

雲影はやし草の波

八

想を秘めし若人が

唇かたくほほゑみつ

仰げば高く聳え立つ

羊蹄山に雪潔し

羊蹄山に雪潔し

羊蹄山に雪潔し

心の故郷

(大正十一年桜星会歌)

一

心の故郷よ石狩の
夢杳かなる草の野邊
花は煙りて影仄に
生命の光榮と喜悅を
恍惚につゝむ憧憬の
薔薇色の露慕はしや

二

夏の園生の逍遙や
野花の息吹に風の香に
燦めく光りさゆらぎつ
樺の緑のほの薫る
木梢に歌ふ若鳥の
朗にひゞく曙の聲

三

楡の林の星の灯よ
あはれ高鳴る靈と智の
諧調豊けき魂の琴
黄金のさやき銀のいろ
郷愁あはき秋の夜の
沈黙にふるふ星の灯よ

四

白銀の宵闇深く
氷柱に映ゆる紅の
神秘たゞよふ火明りよ
熱き情想の律動きて
明と暗との幻影に
聖き黙禱の魂ゆるる

桑榆哺紅に

(大正十四年桜星会優勝歌)

木村英男君 作歌
宗知康君 作曲

一
桑榆^{さうゆ}哺紅^{ほこう}に彩^{いろ}なせる

われ吾^わが戦友^{せんとも}の血涙^{けつるい}史^し

そは繚原^{れうげん}の火^ひと燃^もえて

今^{いま}幽^{いまい}貌^{ぼう}の曠野^{のくわん}に狂^{くる}ひ

凝視^{ねい}よ感^{かん}激^{げき}の胸^{むね}と胸^{むね}

結^{むす}び輝^{かがや}く雙^{まなざし}眸^まを

二
五障^{ごしょう}の霞^{かすみ}はれ難^{がた}き

酣春^{はる}一時^{ひととき}の綺^{はな}花^なに酔^よふ

胡蝶^{こちょう}蒼^{そう}穹^{くわう}ゆく夢^{ゆめ}しばし

飄^{へう}帆^{はん}輕^{かろ}き景^{けい}雲^{うん}の船^{ふね}

浮^{うか}べん戦^{せん}士^しが情^{むね}懷^{ねち}を

讚^{たた}へ唱^{うた}はん光^は榮^えの優^う勝^{しょう}歌^た

清き郷石狩の

(昭和十五年桜星会三十周年記念歌)

岩崎五郎君 作歌
呉泰治郎君 作曲

一
清き郷石狩の曠野に
うち立てし先人が跡
乾坤に時光流れて
今ぞなる三十年の崇高き青史よ
讃へなん いざ
若き血潮 燃ゆる理想
世を覺醒し世を導かん
傳統の楡鐘高く鳴るなり

二
黒き雲世に狂へども
守り來し正義の精神
青春の生命捧げて
惠ぬなり幽遠なる眞理の秘奥
高唱はなん いざ
熱き感激 たぎる憧憬
美しく強く生かばや
雄叫びは高く湧くなり

三
天地に暴風雨吹ゆるも
東洋に夜は黎明んとす
世界を救ふ大理想もて
うち立てん永劫の平和の大扉
叫ばなん いざ
湧ける激情 あがる歡喜
楡の舎の健兒我等は
生ける證に胸は湧くなり

四
悠久の時の移ろひ
青春のこの瞬間を
星辰澄きエルムの園に
過すなり涯際なき神秘の懷中に
仰がなん いざ
清き生命 高き意欲
先人の遺せし教訓
我等が魂強く打つなり

Bye-Bye!

水野涉君 作歌・作曲

一

バイバイ

だからバイバイ

今日よさようなら

もう^{にど}度と来^こない

今日の^ひ日にバイバイ

三

バイバイ

寮^{りょう}よバイバイ

寮^{りょう}よさようなら

もう^{にど}度と来^こない

今の寮^{りょう}にバイバイ（※この曲に、定まった詞はこの

心^{こゝろ}つ位^{くらい}であとはアドリブで思いつくままに、体力の

続く限り果てしなく歌う。作者はこの曲と「みんな

想い出になつちまえ」という^{にど}曲を残して昭和五十

八年二月四日夜明け前自らこの世を去っていった。）

二

バイバイ

今^{いま}よバイバイ

今^{いま}よさようなら

もう^{にど}度と来^こない

この今^{いま}にバイバイ

ストームの歌

— 醒めよ迷ひの夢さめよ
醒めよ迷ひの夢さめよ —

一

札幌農学校は蝦夷ヶ島 熊が棲む
あれの 荒野に建てたる大校舎 コチャ
エルムの樹影で真理解く コチャエ コチャエ

二

札幌農学校は蝦夷ヶ島 手稲山
夕焼け小焼けのするところ コチャ
牧草片敷き詩集読む コチャエ コチャエ

三

札幌農学校は蝦夷ヶ島 クラーク氏
ピーアンピシアスポーイズと コチャ
学府の基を残し行く コチャエ コチャエ

※色部米作君が、明治三十八年頃、一番の

歌詞を作った。明治四十三年九月に

加藤茂雄君が二番を、

出納陽一君が三番をそれぞれ作詞した。

不老の青春

(恵迪寮百周年記念寄贈寮歌)

千川浩治君 作歌・作曲

一
三代に亘りし 恵迪寮
歴史も経りて 一世紀
祝うは嬉し この寮に
団欒も 楽し 記念祭

二
歳を重ねて 恵迪は
自今は女子 男子らは
高邁なりし 理想など
日夜に励み 探求むなり

三
拓きたる野は ビルの谷
創成川の 柳 何処
憩いとなりし 榆ポプラ
若木に伝う 紳士道と

四
世にも希なる 楽しみは
魂に触れし 若き日の
共に過せし 思い出を
寮友らと語る この時ぞ

五
始皇夢むは 千万世
我らが寮歌は 永遠に
歌い継がれて 尚創り
不老の青春を 歌わなん

開校祝賀の歌

明治四十年 札幌農学校より
東北帝国大学農科大学となりし時

一
神統二千五百年

東海の果に眼りたる

大和島根の民衆は

見よや目覚めて明治の世

天の使命を果すべく

進取の旗を振り立てぬ

三

此の国運に魁し

先づ北辺の島の上

荒蕪を拓き民を植ゑ

不明を教へ道を樹て

進取の民の範たりし

百万の民若かりき

四

此の民衆を導きて

重き使命に負かじと

我が札幌に建てられし

母校よく其の任に耐へ

北辰高く輝きし

其の名声や將た説かじ

五

今や羽翼を整へて

徳乾坤を被ふ可き

国の使命を提げて

千余の学徒 磨き

坤輿の民の師たる可き

新職分は下りたり

六

思へ嘗ては北辰と

光を競ひ白雪と

意氣争ひし校風を

享けし我らの前程は

高く大きく清らなる

希望の色に溢れずや

七

功利若し世の風たらば

其所に我等の戦あり

遊情若し世の俗たらば

其所に我等の戦あり

邪曲若し世の弊たらば

其所に我等の戦あり

八

楡の梢風鳴りて

平和の歌をなすが如

藻岩の雲の峯そひて

莊嚴の色動く如

我等の歌に歓喜と

自信の響こもれかし

二

天に二つの日なければ

地上を西し東せる

文化の潮渦巻きて

日出づる国に相会し

炳焉として虹の如

乾坤茲に光あり

北海道帝国大学独立記念歌

(大正七年)

一

都みやこの花はなを吹ふく風かぜの

津つ輕がるの海うみをこえくれば

石いし狩かりの野の邊べ雪ゆき消きえて

うら若わか草くさの香かも高たかく

白しら雲くも空そらに行ゆき通かひて

羊ひつじの夢ゆめぞ長のど閑かなる

二

さあれ平へい和わの夢ゆめの夢ゆめ

見みよ西せい欧おうの空そらの様よう

怪かい雲うん荒すさび暴あらし風ほ吠え

シベリヤ春はるの色いろもなく

狂きやう風ふう千せん里り胡こ砂さを捲まき

日に本ほん海かいに波なみ高たかし

三

今いまぞ皇みい国くに多た事じの時とき

北きたの守まもりの北ほく州しゅうに

護ご国こくの子こ等らが学まなび舎やの

弥やや栄さかえゆく喜よろこびを

心こころに永ながくしるさんと

歌うたごゑ高たかき春はる今こ宵よい

ラグビー部部歌

坂井稔君 作歌
飯田毅君 作曲

一

黄塵こうじんはるか 隔へだてたる

ここ北溟ほくめいの 原始林げんしりん

巢立すだちし 若わかき荒鷲あらかしの

意気いきぞ満みてる フェアプレー

見みよ 意気いきの 北大予科ほくだいよかラガー

ファイト ファイト

ファイト ファイト ファイト

オンワードズ ヴィクトリー

二

残陽西ざんようにしに 茜あかねして

五彩ごさいの雲くもの はゆるるとき

ダーク・グリーンわかむしやの 若武者わかむしやの

熱ねつぞ満みてる フェアプレー

見みよ 熱ねつの 北大予科ほくだいよかラガー

ファイト ファイト

ファイト ファイト ファイト

オンワードズ ヴィクトリー

ラグビー部賛歌

村岡五郎君 作歌・作曲

石狩いしかりの原はらに草くさ萌もえ
熱砂ねつさ巻まく夏なつの大おお空ぞら
茫々ぼうぼうと凍こる荒野あらのや
夕月ゆうづきに秋あきは落おつとも
血ちと汗あせに若わかき獅子しし群むれ
球たまを追おひて大だい地ちを駈かける

山岳部部歌 — 山の四季 —

(昭和十四年頃)

朝比奈英三君 作歌

渡辺良一君 作曲

一

ふぶきの尾根も 風止みて
春の日ざしのおとずれに
沢のなだれも 静まりて
雪げの沢の歌樂し
いざ行こう 我が友よ
暑寒の尾根に 芦別に
北の山のさらの尾根を飛ばそうよ

二

沢を登りて いま五日
ワラジも足に 親しみぬ
三日三晩の 籠城も
過ぎて 楽しい 思い出よ
いざ行こう 我が友よ
日高の山に 夏の旅に
北の山のカールの中に 眠ろうよ

三

山は紅葉に 色どられ
頂高く 空澄みぬ
新雪輝く 山は
いずれも 親しき 友だちよ
いざ行こう 我が友よ
ニセイカウシュベに トムラウシに
北の山の沢の たき火に 語ろうよ

四

吹雪も 止んだ 朝まだき
凍った テントを 起き出でて
はるかに のぞむ やせ尾根は
朝焼け 燃ゆる ペテガリだ
いざ行こう 我が友よ
氷の尾根に アンザイレン
北の山の 聖き 頂 目指そうよ

漕艇部部歌

— 春三月の（茨戸の歌） —

（昭和三十年）

木原慎一君作歌・作曲

一
春三月の蝦夷島
はるさんがつ えぞがしま

長き眠りにとぎされし
ながねむ

茨戸河畔の雪とけて
ばらとかはん ゆき

とく待ちわびし水の子の
ま

喜び笑ふ声すなり
よろこえ

二

岸の辺近く郭公の
きしべなか

啼く音うれしく聞き初めね
なかね

漕ぎ来し方を眺むれば
ここ

霞にとける野の煙
かすみ

水郷の春の昼閑か
すいこう

三

岩燕は去りて風熱き
つばめ

夏たけなはの候となる
なつ

運河一発引き抜きて
うんが

しばし憩はむ土手の上
ひつじ

羊も寄りて草を食む
ひつじ

四

いつか炎暑の日はゆきて
いんしょ

光のどけき茨戸河
ひかり

青き水の面に波立たず
あおみ

こよなき季節訪れぬ
せつおとす

心ゆくまで漕がむかな
こころ

五

手稲は紅く空高く
ていね

秋の気深くなりにけり
あき

かい先近くほらはねて
さきちか

夕練習終へるころ
ゆべれんしゅう

陽はくれないに没したり
ひ

六

河霧深くたちこめて
かわきり

霜結ぶ朝艇出す
しもむす

みぎわの木々は枯れはてて
みぎわ

冬もま近となりぬれば
ふゆ

惜しみて漕がむ残る日々
お

七

北風すさび雪は舞ひ
きたかぜ

ふぶきに暮れる冬の河
ふぶき

今日ぞわれらが漕ぎ納め
きょう

いざわが友よ胸深く
いざわ

また来む年の幸思へ
また

ヨットマンの歌

一

腰こしのシーナイフにすがりつき

ついて行きます何処どこまでも

ついて行くのは易やすけれど

女乗おんなのせない二三号艇さんごうてい

二

女乗おんなのせない二三号艇さんごうていなら

長い黒髪くろがみ断たち切きって

可愛いクルーになりすまし

ついて行きます何処どこまでも

三

四年よねん三年さんねんジジクサイ

二年にねんそれぞれ彼女かのじょあり

可愛いかわい一年いちねんにや金かねが無いな

女泣おんななかせのヨットマン

四

いいじゃありませんか

ヨットマンは

ボロのズボンにボロのシャツ

ポロのヨットに乗のつても

腕うでは確たしかなヨットマン

五

いいじゃありませんか

ヨットマンは

欠かけた茶碗ちやわんに折おれた箸はし

クサレズツペにクサレ飯めし

それでも生きてるヨットマン

六

いいじゃありませんか

ヨットマンは

太ふとい腕かひなに黒くろい顔かお

キリリと縮しまった口許くちもとが

グーッといかすぜヨットマン

七

浜はまの娘むすめが噂うわさする

愛いとしい人ひとヨットマン

お嫁よめに行くならヨットマン

今夜こんやも楽たのしい夢ゆめを見る

ヨットマン ヨットマン

ヨットヨットマン

水産放浪歌

富貴名門の女性に恋するを純情の恋と誰が言うぞ。

暗鬼紅灯の巷に彷徨う女性に恋するを不情の恋と誰が言うぞ。

雨降らば雨降るもよし風吹かば風吹くもよし

月下の酒場にて媚を売る女性にも純情可憐なる者あれ。

女の膝枕にて一夜の快樂を共に過ぎずんば人生夢もなければ恋もなし。

響く雷鳴 握る舵輪 睨むコンパス六分儀

吾ら海行く鷗鳥 さらば歌わん哉

吾らが水産放浪歌

一

心猛くも鬼神ならず

男と生まれて情はあれど

母を見捨てて浪越えてゆく

友よ兄等よ何時また会わん

二

朝日夕日をデッキに浴びて

続く海原一筋道を

大和男子が心に秘めて

行くや万里の荒浪越えて

三

浪の彼方の南氷洋は

男多恨の身の捨てどころ

胸に秘めたる大願あれど

行きて帰らじ望みは待たじ

注 成立事情不明なるも蒙古放浪歌

(仲田三孝作詞、川上義彦作曲)の

換え歌と推定される。